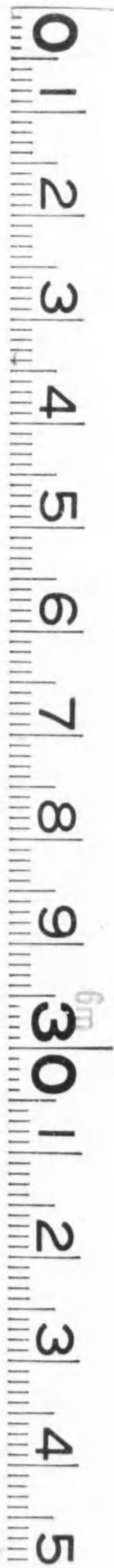


550

574

三十二年天降之命。言諸託胎。皆導軍法。
 八子。度無。服。踵。胎。又。釋。迦。
 丁。上。台。石。林。地。子。之。形。事。志。去。注。息。
 小。時。神。子。付。足。那。便。是。羅。子。的。子。孫。
 江。印。十。集。
 以。神。度。月。人。集。



始



550-571



八
好
書
卷
一
海

大正
15. 10. 11
内交

八軒長屋後編

東京の中央に所謂土一升金一升の軒を並べし大通街は、そろく取毀ちの運命に近づけど、川を隔て、本所の場末に巢を構へし業平町の八軒長屋、いまだ市區改正にも取拂はれず、地震にも潰れず火事にも焼けず、なほ依然として家は舊のまゝに古く人は益々貧乏達者に生き残り、

八軒長屋後編

何の因果か、そのまゝ引きつゝいて貧乏動きも出来ぬ居残りには、あはれ浮世の辻俵に九尺一間の楯も取り兼ねし熊さん夫婦と、夜なく、淺草の薄闇に神易の弓張提灯を照らしながら、自己の塙に豆ランプ一個もない八卦よい屋の朝鮮髯と、いつも本来の馬脚を現はしながら恥を恥と思はねば恥かいた例もない色狂者の花野露雄と、いつまで

生きて居たくもないが殺して人もないと吐す業突張のお虎婆、あけても暮れても的のな
い九州の空のみ眺めて泡を吹く鑛糞野郎の西川要五郎と、十年以來、彼是に蚊の脛を飛
ばして歩く千三屋の石作、以上六人に新來の二人は、正體の分らぬ大浦卓三といふ三
十男、かの首吊往生せし星影先生の空巢へ住み込み、素性の知れぬ七味唐辛子賣の喜
助といふ四十男、かの瀬田とよ子と松坂あさ子が遁け出せし空巢へ住み込んで、もは
や一戸の貸家札もない八軒長屋、いよくこゝに一蓮托生の閻浮提を開きぬ、

我國の統計上、固定資本と流通資金を別にして、現在その所有金を人口に平均すれば
一人に付いて三圓内外、その體量の平均は十三貫目前後、家宅の面積は一戸に付いて
七坪八合餘、男女一切の食料より一日の廁へ落すべき汚物の量は糞が二合五勺となり
尿が七合八勺となり、大小便を合して一人に一升三勺づつの割合、この數の上より見

れば八軒長屋に住むもの、あはれ果して満足に一人前の人間ありや否や、
一人に付いて三圓の平均は儲置き、やうく其日の飢渴を凌いで銅貨一枚も無事に殘

| | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 大浦卓三 三十一 | 長屋のお虎婆 六十六 |
| 辻待車夫 熊ササノ 女房 四十三 三十七 | 唐辛子賣 七味 唐辛子屋 四十一 助 |
| 實上肴 幸遇齋 四十八 | 西川要五郎 山部落魂 三十六 |
| 新借儀の 馬野齋 花野齋 二十 | 石三作藏 三十七 |

八軒長屋 (口入)

らぬ境涯、體量として浮世の風に肉を殺ぎ落されつゝ骨と皮とに瘦せこけたる貧苦の身

が何として十三貫目を保つべき、中にも例の石作と朝鮮髻の如きは五體に纏ひし襪褌ぐるみ八九貫目あるか無しかといふ情無い奴、住む家の面積は固より長屋一棟の割壁九尺一間づつの破畳三枚、これを坪數に直して一坪半、糞と尿を合して一升三勺づつの大小便さへ、年が年中の空腹より逆も毎日平均に放り出すべき筈なし、されど車夫の熊さんくまは流石さすがに勞働者らうどうしやとて十四貫目餘、鑛糞野郎かなくそやらとの西川にしがはも此奴こいつまた不思議ふしに瘦せ衰へぬ小肥りの十三貫目以上ながら、貧乏も埒はらも同じ浮世うきよの底そこの一蓮托生れんたくしやう、たま〜湯水を飲み過ぎて七合八勺より多き尿は放り出せど、悲しや糞のみは未だ會て一人前の二合五勺を固く垂れた事ことの無い筈はずの中に一人、近來こゝへ落ち込み來りし彼の大浦卓三おほうらたくさうばかりは、金も體量も糞尿も世間の平均數へいきんすうよりは圖づぬけて頗る多い奴、のそりとして悠々たる體てい、いかにも此長屋このながやに不相應ふきやうおうの男をとこなり、長屋の奥の總雪隠そうせついんに向うて、右側の二軒目に相も變らぬ例の熊さんくま、前夜は運よく一

時過まで稼いで今日の米代こめだいに驚かねば、今朝はまだ其まゝの煎餅蒲團せんべいぶたんに鎌首かまくびを擡もちげながら、これも一日の安心あんしんに平常つねよりは落着いたる女房お菊にようぼうきくと聲こゑを潜めて私語ひそきぬ、「ねエ、おい鼻ア、今日で三日目になるが隣屋の大將たにやう、どうだね、少しやア鑑定あたりが付いたかい」

「さア、まだ分らないよ、しかし良人さん、どう見ても賤いやしくな立派りっぱな旦那風だんなふうで、萬事ばんじが大様おほやうで、そして妾等わたしらにも高たかぶらないで、あの大兵だいひやうに手輕あいきやうい愛敬あいきやうのある工合ぐあひ、なか〜捌さばけた方かたらしいよ、朝は召上めしあがらないやうだが晝ひると晩ばんの二度は、どツか外ほかへ御飯ごはんを食たべに出て、歸かへると其まゝ新しい白しろい毛布けつとを三枚も着きて空氣枕くうきまくらに寢ねてばかり居ゐなさる様子やうすが猶更なほさに分わからないよ、いくら考かんがへても良人さん、たゞ生きてるばかり骨ほねの折をれる身分みぶんとは見えないさ、結局つまりこの長屋ながやに住すむ筈はずの人品ひとがらぢやアないね」
「そこだ、蟹かには甲羅かふらの穴あなで、この長屋ながやへ落おち込こんで來くる筈はずの奴やつア、鬼おにの孫まごでも蛇じやの身み

子でも軒を竝べて平氣だが、住む筈のねエ人間が不意に壁一重の隣屋へ用もなく、茫然と來て居られちやア正體の知れるまで何だか氣に懸つて變な心持だ、大體の根も葉も違つてるやうだが、あの星影先生で随分、懲りたからなア」

「眞實だよ、同じ唐突に引ッ越して來ても、すぐ其場で商賣もんの七味唐辛子を一袋づつ配り歩く人の方が却つて心易く、氣を許して交際も出来るからね」

「は、は、は、朝鮮髻と石作を餅に搗いて其上また御丁寧に焼き轉がしたやうな、あの七味唐辛子屋、どうだい、いづれも様で素裕一點の寒曝しは珍らしくもねエが、だしぬけに引ッ越して來るや否、女物の仕立て直しを尻ひツからけた草鞋穿のまんまで蕎麥の薬味だけを配り歩きたア、いやに敏捷こく貧乏馴れた惡洒落な野郎だ、ますくこの長屋も呵しな奴で妙に繁昌するよ、は、は、は、」

これが此奴の持ッた持病、そもく八軒長屋の出來事には必ず第一番に狼狽へ出して加之も飛び出す毎に首尾よく爲損じながら、さて懲りもせぬ八卦よい屋の朝鮮髻、また例の瘦せこけた面相に猿の如き眼を剥き出しつゝ、きよろくとして熊公の許へ慌て込みぬ、

「やア熊さん、いよくお隣屋に事ありけりだね、どうも變だよ、をかしいぜ、實は今、長屋の入口へ俵を卸して八字髻の生えた當世風の洋服がね、近來この奥へ大浦卓三といふ人が引ッ越して來た筈、たしかに居られますかと尋ねるから、居るといへば其まゝ這入るべき筈の奴が忽然また俵に飛び乗つて驅け出したぜ、え、熊さん妙ぢやアないか、これ大に仔細なくて叶はンよ、しかし本人に通じたもんだらうか黙ッて居た方が宜からうか、ちよいと相談かたぐ」

きくや否、いつも此奴がと、熊公よりも女房お菊の面白からぬ顔色、

「そろく／＼また八卦屋さん、お株を持ち込んで来たね、良人さん、そんな相談に乗せられては困るよ、例の調子で、ろくな事になりやアしないさ」

「例の調子で、ろくな事とは酷い」

「ぢやア何か、これまで長の間、唯の一度でも良人の爲になる事を持ち込んで下すツた覚えがあるの」

「ある無いに拘はらず、お互だよ、かうして住めば同じ一棟に繋がった生物だから、こりやア義理人情、馴染の古い浅いは儲置いて、このまゝの聞捨にも出来ないさ、わざ／＼尋ねて来て其本人が居るといへば其まゝ這入らずに飛び出す奴、いづれ曲物に極つたりだ、ねエ山の、お神さん」

「山の字だけ餘計だよ」

「や、これは失策、時に熊さん、どうしたもんだらう」

熊公おもはず苦笑ひしながら振り返りぬ、

「馴染が浅くツても、それほどの義理人情がありやア聞捨に出来ねエ汝だけ、まづ隣屋へ駆け込んで御注進するさ、はゝゝゝしかし今、書飯を喰ひに出たやうだぜ」

「さアその飯も眼の付けどころだ、そも／＼この長屋に住んで居て、あの大きな身體へ自然に備はった風俗が第一に不相應だよ、加之も平氣に澄まし込んで懐手のまゝいち／＼ぬツと外へ喰ひに出る工合ぢやア、まさか熊さん、ぶツかけの立喰でもあるまいな、して見るとさ、ます／＼變だぜ、今の尋ねて来た當世風の洋服が、もし身を忍ぶ隠れ家へ窺ひ寄りし敵の間者とすれば、いよく尋常の落武者ぢやアないよ、どうも萬事の様子が雑兵の流れ込みとは見えない、事と品に依つては一番、ぐツと力を添へて二度の旗擧さしたいね、浮べば諸共に運の開くこつた、なアに敗れても此方は裸馬に落す荷物も無いからな、はゝゝゝ腹さんざ秣を食って鞍でも脊負

「いえ何、同じ棟割の九尺一間でも馴れた自分の住居と違つて他様へ伺へば、格別また氣の轉ずるもので御坐いますよ、加之も年が年中の貧乏神とゞまり在す此うら長屋の名物で、ほろくの不淨談話を何日も八重垣に聞き飽いた耳の穴へ、ぱつと不意に天の岩戸の明いたやうな世間の面白い事を承れば、身體の養生にもなります次第で、へゝゝゝゝ」

八卦よい屋め、こゝに一期の智慧を絞つて饒舌り立てぬ、

同じ浮世の戰場より落ちて來ても、陣笠を押し潰されし雑兵と金鍬形を折られし内兜の大將分とは自然に武者振の相違ありと、毛虫の如く大浦卓三の襟に取付いたる八卦よい屋、ほしやくの朝鮮髻を捻りながらの俄の追從輕薄、されど流石に何とやら氣恥づかしく鄰屋の熊さん夫婦へ憚りて、おもはず聲を潜めぬ、

「どうせ何か、一時の御都合上で、とても長く此のまゝ在らつしやる筈は御坐いますまいが、せめて貴君方と同じ一棟に住めば縁に繋がる拙者共も自然に運の開ける瑞相で、多年この長屋を遠慮なしに我物貌の定宿と致した貧乏神も、そろく薄氣味わるく、今までのやうに落着いて安心は出來ますまいよ、へゝゝゝ」

骨と皮とに瘦せこけた八九貫目あるか無しの朝鮮髻が空笑ひ、最後の一發も放り得ぬ死際の脚に等しく、二十貫目に近い大浦卓三が便々たる腹の底より吹き出す高笑ひ、寢惚けし虎の嘯くが如し、

はゝゝゝとんでもない、そりや大變な見當違ひだ、うかゝこの大浦卓三に縁を繋ぐと折角、開きかけた運も塞がって、生優しい貧乏神の子分が足溜りの定宿ぐらゐぢやア濟まない、七福神の油断を見澄まして三盃酸にして喰ふやうな親分株が屋敷を構へに來る筈だからな、はッはッはッ現に先刻わざ／＼尋ねて來て其まゝ引

返したといふ奴、それが貧乏神の斥候だ、いよく近日のうち頭領の奴が數多の眷族を連れて押し寄せるだらう、どこを見ても同じ九尺一間だから固く戸を閉めて用心しないと、狼狽へて飛び込む奴があるかも知れませんぜ、は、は、は、」

いかに外貌は大兵なりとて、須磨の浦浪に漂ふ小敦盛のやうな公達生育の落武者と思ひの外、これは坂東一の熊谷を取って捻ぢ伏せさうな苦勞人の果、あたらし追從輕薄を一口に揉み潰されて聊か拍子ぬけの朝鮮髻、されど組み付いて損のない敵と飽くまで取縄ッて放さぬ覺悟なり、

「へ、へ、御戲談を、誰が貴君、うけますもんで、これだけは拙者の本業上、たしかに動かない卦が立ッてる筈で御坐います、そもくこの長屋へ根の生えるものは必定この長屋相應の貧相を備へて居りますからな、へ、へ、へ、」

「さ、そこだ、生涯この長屋相應の貧乏で住み終せる人よりも、ぐツと飛び放れた大

貧乏の骨相を備へてるんだ、論より證據、いづれ近日あらためて事實を御覽に入れよう、時に如何ですな、少し早いやうだが、お差支なくば出かけませうか、その邊を運動かたぐ夕飯に」

「や、何よりの證據、あらためて拜見いたさずとも、現在それが貴君、貧乏といふもんで御坐いますかね、この長屋に住んで運動かたぐ夕飯を外へ喫べに出るとは、へ、へ、拙者も死ぬまでの間に一度、さういふ洒落た面白い事を言ッて他を連れ出すやうになりたいもんで御坐いますよ、へ、へ、へ、」

「なアに世の中に生きてる人間だもの、喰はなければ死ぬより外アない、貧乏と喰ふ事は別問題だ、そいつが同一物になッて堪るか、は、は、は、」

名にも身體にも反かぬ男、なかく大きいところあり、

いかな見倒し屋の紙屑買に見せても、棟割の九尺一間にある筈の品物でないと言はるべき大浦卓三が、悠々たる山の如き風采態度、のツしりと二十貫目の大兵を運び出す背後より、これはまた八軒長屋の床下に湧いて出た蟲かと怪しまれても、誰一人さうではないと言ひ切らぬ筈の朝鮮髻、ひよこくと小腰を屈めて従ひ行く體、をりしも左側の二軒目より表障子の破れ目に差覗きし七味唐辛子の喜助、ちらと見て、ぷつと吹き出しぬ、

しかも此奴、あくまで貧乏馴れて浮世の底に悪摺れの四十男、いはずともこの事は猶更ら四邊近所へ友呼ぶ大聲あけて喚きたい奴なり、
「こいつア妙な取合せだ、珍無類、奇妙奇轉烈な圖が動き出した、は、は、は、は、しかし落つれば同じ谷川の水だ、かうして一所の窪みへ流れ込んだ以上は雪も氷も雨滴もない筈さ、どうか斯うか時候に合つた着物を纏つてる奴も、女物を仕立て直した素

給一枚の野郎様も、高低なしの一系列に交際ひたいもんだなア、面白くもない、見る目が辛いよ、何を食つたか、全體あの嫌に肥り返つた、でツかい護謨鞠のやうな奴も奴だが、べこく後から附隨いて行く唐變木の巢枯れた胡摩摺めが癩に觸るさ、主従なら主従と最初に長屋中へ觸れて置くが宜い、をかしく癖になると外が迷惑だ、ねえ鄰屋の婆さん、さうぢやアないか」
鄰屋は例の業突張お虎婆ア、得たりと待ち兼ねし亂杭の齒を現はしながら、いよく輪をかけた悪まれ口、

「なアに喜助さん、あの一軒目はね、ふしぎに正體の分らない妙な奴ばかり住み込むよ、先に居た奴は下手な張子の狸へ仙人の生靈が取つ付いたやうな變てこの奴でさ、學校の教師でも醫者でもないに、どういふもんか頻りに先生々々といはれて居たが、今汝さんの住んでる家に巢籠りして居た鰕茶の腐れ阿魔と乙な事になつてね、空屋

「たゝ大變だ、熊さん大變だ〜」

長屋の入口より慌て込んで、きやツ〜と叫ぶ朝鮮髯の聲に、熊公おもはず女房お菊を振り返りぬ、

「そら来た、いはねエ事か八卦よい屋め、いよく何か失策を遣らかしたぜ」

「面倒だから戸を閉めてお仕舞ひよ、蒼蠅いわね」

はや蝗の如く飛び込み来る幸運齋、自己が願を両手に確と押へて半泣きの體なり、

「どうしたい瘦馬、鄰屋の大將を乗つけて出た様子だが、不意に尻尾の毛でも引ん抜かれたンぢやアねエか」

「尻尾の毛どころか、願の毛だ、拙者この髯を抜かれては今夜から本業の看板がな
いよ熊さん、實は生命よりも大切な髯だ、どうしよう、ざゝ残念だ、口惜しくツて

ならない、居ても起ツても堪らないよ堪忍が出来ないよ」

「はゝゝゝ、そいつア大變だ、名物の朝鮮髯を抜かれたンだな、どういふ理由か知らね
エが鄰屋の大將も随分、ふざけ過ぎた酷い悪戯をするよ」

「いや、なに熊さん、鄰屋の大將でないよ、その相手が、そゝ其奴が、いよく以て猶
更ら無念骨髓に徹する奴だ」

「全體どこの誰だい、兎も角も手を放して見せな、どんな工合に引ん抜かれたンだ、
おや、何ともねエぜ、ほしやく〜と元の通りに生えてるぜ」

「生えてる、さういふ筈はない、皆まで引ん抜かれないが、たしかに半分ぐらる摺り
取られたよ、その證據には今まだ此通り、ぴり〜と痛くツて堪らない、畜生この
大事な髯を摺んで凡そ一二間も引摺りやアがツたからな」

「はゝゝゝ、まア落着いて話すが宜い、たとひ半分でも残ツて居りやア看板に差支はね

エよ

「ある無いは兎も角、實ア熊さん、大將の御供を申してね、上野まで行ッたのさ、上野まで、加之も拙者こゝに十餘年來、絶えて久しい會席料理の御馳走、無論、酒も飛切の上等だよ、いやはや堪ッたもんでない、ほッと氣の遠くなるまで夢中に戴いて、そこを出ると大將は途中から他へ廻られた、あとに拙者一人いよく御氣嫌の體で、ぶらく本願寺の裏手へ差かゝると熊さん大變、例の廂髪だ、あの瀬田とよ子の畜生が二十六七の書生と、手を引合はンばかりに遣ッて來るぢやアないか畜生」

「えッ、阿魔、ぢやア遠くもねエ穴に居やアがるンだな、よし汝ッ」

「それも熊さん、あッと驚いて遁け出すかと思やア、呆れたもんだよ、まさか拙者を見忘れる筈も無からうに、洒アくと向ッて來るぢやアないか」

「いけ太エ畜生だな、よく満足に歩いて來やアがッたよ」

「やッたぜ、やらいでか加之も久しぶりに酔ッた勢ひだ、摺れ違ひに飛び付いて横ッ面を一撃、やッた事は熊さん、やッたんだがね、その連の書生め、けしからン強い奴でね」

「ちよッ、鈍癡だなア、考へて見ろ、死際の肺病人か小兒の外ア、凡そ世の中に腕づくで汝の勝てる相手があるかね、あまり智慧が無さ過ぎるよ、分相應の役目に何故そツと這ひ込む穴を見届けた上、乃公に知らしてくれねエンだ、阿魔の横ッ面は宜いが忽然その場で、その書生ッほに小ッ酷く遣られたンだらう、大切な髻まで撈ら

れたンだな」

「熊さん残念だ」

「遅いよ」

悠々たる風采態度に似合はず圓轉滑脱の調子を帯びて、わざと作らぬうちに案外の世辭愛敬を含める大浦卓三、はや日は暮れて夜に入りし九時頃、のツそりと例の大兵肥満を運びながら暫時の浮世こゝを假寝の八軒長屋へ歸り來りぬ、
加之も元來どこやらに一點の洒落氣を帯びし男、そのまゝ自己が塹へ這ひ込むも面白からずとや、小聲に朝鮮髻の宿を差覗きぬ、

「まだかね、お不在かね」

豆ランプ一個もない眞黒闇の中より蟹の如く、ごそくと這ひ出す音、

「や、お歸りなさい」

「はゝア、居るんだな」

「居りますとも、久しぶりに戴いた折角の御馳走を、些少な見料に饒舌り立て、腹を減しちやア差引勘定、第一また貴君へも濟まないと存じて、今夜ア淺草へも出ず、

じつと靜に宵から此通り神妙に寢て居りますよ」

「なるほど、こいつア一理あるね、なか／＼妙な工合に經濟を考へてるよ」

「そりやア貴君、その位な事は心掛けて居りますよ、毎日あゝいふ御馳走に逢へば、いつも此通り宵から神妙に寢込んで淺草へは出ませんね」

「はゝゝ一本やられたわい、しかしかう、まッ闇な中で寢て居ても不自由だらうに」
「いや、これまた經濟の一端、營業上の淺草では惜氣もなく神易の弓張提灯を照らしますが、遅く歸つて寢るより外に用のない身ですもの、火の氣は入りませんよ、もし萬一の事があれば直ぐに飛び出す覺悟で、をり／＼豆ランプの油が無くなる奴よりは結句、氣樂で便利で、しかし貴君に此まゝでは失禮、只今その提灯を點けます、ちよいと、お待ち下さい、はてな、この邊にマツチがあつた善だ」
「なアに別段、談話もないんだ、そのまゝ寢なさい」

「いや是非、お這入りを願いたい、まだ九時か十時、實は身體を横に致しましただけで、大きな眼を剥いて居りますよ、それとも拙者お伺ひ申して貴君の方のランプを點けませうか、お手が油臭くなりませ、大將、大將」

いへども大浦卓三、はや無言のまゝ過ぎ去りし後へ不意に向側の石作、

「うまく遣るね」

「や、石作さんかね、どうですな、この二三日は駆け違つて逢はないが、よほど外に面白い口を見付けたやうだね」

「おツと、算木の置きどころが違つたよ、まごく外へばかり飛び歩くからね、却つて燈臺の下暗して手近の大油斷、あゝいふ甘味い口の内にあるのを知らなつた、今の様子ぢやア随分物になるらしいね、一人占領は酷いよ」

「しッ、聲が大きい、中間一軒だ」

「兎も角も神易に火を點けなさい、幸ひマツチは持つてるよ」

「それに及ばない、まッ闇でも談話は出来るさ、はゝゝゝ」

「現金だね」

「お互様だ」

をりしも筋向ふの西川要五郎、ぱツと俄に豆ランプを差出しぬ、

「なアに點火ぐらゐは僕が資本金を入れるよ」

晝飯と夕飯を喰ひに出る外は、さらに用のない大浦卓三、まして朝飯を喰はねば其ま九時過まで起きませず、この八軒長屋には猶更ら目立ちし眞白の大毛布三枚を打被つて新しき空氣枕に大の字形の高躰、いよく尋常の落武者でなし、

をりしも門口とて雨戸さへなき破れ障子一重の外より、昨日わざと訪ひ来て忽然ま

た引ッ返せし八字髭、年輩三十前後の仔細らしき當世男と四十餘の一癖あるべき商人體、そツと差覗きながら互に顔を見合せて今更ら呆れ顔なり、

「大浦さん、大浦さん、まだ御睡眠ですかね大浦さん」

實は寢入らぬ本人、わざと二聲三聲を呼ばせし後、やうく太き首骨を擡げぬ、

「誰だ、誰です」

「坂上と、黒川です」

「や、坂上さんか、こりやア失禮した、む、黒川さんも御同伴で、さア御遠慮なく其

ま、しかし、こんな窮巷を、よく分りましたね」

靜に白毛布を丸めて片隅へ押遣りつ、自己が五體を持て餘すが如く身を起して、の

そりと立てば、さらぬも低き棟割長屋の天井に二三寸の大男、

「は、御覽の通り、うツかり立つ事も出来ません、屈んで居ても尋常外れの身體

ですから満足に手足を伸ばされませんよ、だが今日の大浦卓三、こゝばかりぢやアない、どんな廣い天地へ出たツて頭も手足も悶へる筈で、身を縮めて小さくなるのが當然でせうよ、は、は、は、

「坂上といふ四十男、俄に眼を光らしぬ、

「大浦さん、兎も角も今日の我々は、これまでの御交際と違ツて、た、暢氣に貴君の

酒脱したところばかり伺ツて居られませんよ」

「黒川といふ八字髭の三十男、

「どうか大浦さん、その御覺悟で」

大浦卓三、いよく悠々たる體に満面の微笑を浮べぬ、

「や、無論その邊は萬々、承知いたして居りますよ、わざわざ御兩人も揃ツて此、こ

の見苦しい九尺一間の裏長屋へ御遊興かたぐ入らツしやる筈がない、しかし、ち

相談上、つまらない枝葉に渡らないため、幸ひ今度の一件に關係の黒川さんを同道
 しました理由でね」

「今、坂上さんの言はれる通りで、この黒川が辯護士といふ上からは、既に先々月あ
 の時に行うたのみで、以來、實は貴君とも知らない間では無し、どうか相互の中間
 に立って出来得るかぎり、圓滿に局を結びたいと思つて居ましたのさ、それに大浦
 さん、あのまゝ黙つて不意に飛び出すとは酷い、甚だ宜しくない、あまり無責任だ、
 勿論、僕の方へは昨日の朝こゝに居られるといふ葉書は來たにしても、その間が殆
 ど一月の餘ですからね、しかし執達吏の方の競賣期日には、まだ五日の延期猶豫に
 なつて居るを幸ひ、今日の黒川は貴方に對する好意上、この坂上さんと同道して來
 ました理由です、もし差押へたものが競賣の結果、その債權額に餘るとか但し相當
 するとかの貴君が、不意に所在不明といへば却つて人格の點を面白く感じますが、

現在、二萬圓内外も足りないといふ事は誰の眼にも分つてる貴君として、これまで
 は頗る男らしくない、妙に遁けたと思はれても仕方ないんですからな、しかし他の
 人と違つて、あくまで貴君を信じて居る黒川です、また債權者の諸氏に於ても、十
 二三萬圓で此まゝ斃るべき貴君とは思つて居ませんよ、さらに一步を進めていへば、
 十二三萬圓で貴君を倒して仕舞つては實に惜しいといふ點がありますから、今日も
 斯うして坂上さん同道で伺つたのです、考へて御覽なさい、一時に四十日間も延期
 したのは、よほど債權者が貴君を買つた證據ですぜ、ところが唐突に一個月の餘も
 所在不明で、その四十日も殆ど餘日なく、もはや競賣に五日の今日、全體どういふ
 御覺悟です、この黒川は自分の託された職責上、已むを得ない期日に至るまで決
 して法律を荷ぎ出しませんから、貴君も徳義上より打ち明けた御決心を承りたい
 です、大浦さん、如何ですな」

大浦卓三は例に依つて例の悠々たる態度、此ま、大地に滅り込むとも更に驚かぬ顔色、微笑を浮べて首肯きぬ、

「坂上さんといひ黒川さんといひ、段々の御好意は有難く存じます、その有難い御好意に對して猶更ら濟まないこつてすが、少々ばかり饒舌らして戴きたい、あのまゝ、不意に飛び出して妻子も連れず只一人、この裏長屋へ落武者となつたには聊か理由のある事です、や、障子の破れ目から覗くのは八卦屋さんだね、氣の毒だが其邊で何か菓子と、言つても茶器がないから、いけない、さうだ、幸ひ林檎でも買つて貰ひたい」

鞆の口を開けて紙入を取出しながら、五圓紙幣一枚を掴み出しぬ、
「こりやア差押への外ですよ、財産隠匿の罪に問はれては困る、はゝゝゝ」
債権者は七人、負債の金高は合計十二萬圓餘、その總代に押寄せし坂上と辯護士の黒

川を相手にして、今この八軒長屋の九尺一間に悠々たる大浦卓三、なるほど敗れても落ちてゐる雑兵葉武者にあらぬ男なり、

「坂上さん、黒川さん、こりやア貴君方に對して今更ら未練らしい申譯めいた理窟を並べるんではない、もしまた哀訴歎願する氣でもあれば、あのまゝ、無斷に飛び出して猶更ら債権者の感情を害しません、さらに事實の成行からいへば論も糸瓜もないこつた、當然の義務を認めて法律上、神妙に差押へられたものを、その期日に至つて権利者のために競賣せられるんだ、また見積つて二萬圓内外、足りないといふ御言葉もあるが、そりやア、さうでせう、まづ世間の例として、どうせ數人が加入し合つた競賣の結果は、いづれ足らないもんですよ、足ると見れば強ち差押へもすまいし、また餘れば差押へられもしませんさ、よし債權額以上あるにしても、既に公然と強制の文字を冠せる執達吏の手にかゝれば必ず足らないに極つたもんだ、つま

り押へる奴も馬鹿、押へられる奴は其上の馬鹿、お互に眼の見えた恰憫な人間の喧嘩でないね、加之も商人としては實に算盤勘定を知らない大馬鹿の摺み合ひだ、苟くも十何萬圓としては、ますくその大馬鹿に輪が掛つて、雙方いかにも働きのない思慮のない白癡の骨頂が明かに證明せられますね、は、は、は、とここで坂上さん、勿論、黒川さんにも申し上げるが、この大浦卓三は自分相應の決心して居るよ」

「馬鹿の講釋は儲置いて、その決心を伺ひませう、ね、黒川さん」

「さやう、その決心に依つて、致方がないから斷然たる處置を取りませう、大浦さん全體どういふ決心です」

「は、は、は、金錢の多少よりも信用と手腕で世に立つべき商人へ對して突然、強制執行をした以上は、もはや既に斷然たる處置を取つて居なさるんぢやアないか、致方がないからといふ、その致方のないのは此方の事ですよ、は、は、は、まづ期日に至つて

神妙に謹んで相違なく競賣せられる決心ですね、この大浦卓三の一身としては目的の絶頂に上り得ない山の半腹より轉け落ちたも同然、聊か残念ですが、つまり京橋の通街に一軒の清韓貿易商店が無くなれば宜いんだ、それで事が済むんですよ、無論、競賣の結果、二萬圓でも三萬圓でも不足した分は、あらためて證書に仕直し立派に債務を受けますよ、多少の根さへあればまた自然の春に逢うて芽の吹き次第、すぐまた遺憾なく早速寄つて集つて撈り取りに來なさい、せめて四十萬とか五十萬とか人に聞かれても金らしい金なら随分、みごとに踏み倒す工夫もして見るが、なアに二萬や三萬の端た金で生涯の男を潰しちやア其方より此方の差引勘定が合はなから、御安心なさい、倒せといはれても倒しませんぜ、は、は、は、ついでに貴君方へ一言、ちよいと通じて置きますがね、大浦卓三、あのま、不意に飛び出して殆ど一月の間、この裏長屋へ閉ぢ籠つて居たのは貴君方に對する借金のためでない、

そりやア差押への成行と結果が自然に解決を與へてくれる筈だから、一切放任して仕舞って、實ア自分の前途、あらためて無一文の丸裸より再び這ひ出すべき將來の方針を考へるため、どうせ仕様のない面倒な蒼蠅い事を差支のない時日内に避けたんですよ、しかし、どうか斯うか、その方針も定まり、また一方の時日も迫って来たから昨日の朝、始めて黒川さんへ所在の端書を出しましたのさ、は、は、は、時に先刻から貴君方が頗りに好意々々といはれる、その好意なるもの、もし果して實際の善後策を取って下さるといふ好意なら、今の負債に對して如何なる好意も有難くない、たとひ負債額を三分の一にして貰っても嬉しくない、どうです、これまでの借金（おはやくきん）は借金として置いてさ、この大浦卓三へ改めて十萬圓ほど貸して下さらないか、つまり瘦せたところを叩いて取るよりも滋養物を與へて肥えたところを絞る取る工夫（ふう）ですぜ、はッはッはッはッはッはッはッはッ」

腹の底の太息、ぷつと吹き出して、天井を仰ぎながらの高笑ひ、長屋中に響き渡りぬ、

「どうです、西川さん」

「や、八卦屋さん、近ごろ君の取入った御大將の館に今朝、何だか、事があつたやうですな」

「へ、へ、へ、事も事に依りけりさ、西川さん以後は一切、お氣の毒だが少々、言葉を謹んで貰ひたいね」

「おや急に改まって、妙に角を立てるぢやアないか」

「立てるよ、立てずに居れない場合だ、うかく、今までの調子で遣られちやア甚だ困る」

「何故、何のこつた」

「なせも畦も畑もあるもんか、憚りながら京橋の中央だ、仙人の寢言を聴くやうな雲や霞に隔たつた九州の空で無いんだからな」

「變な事を言ひ出すね」

「何が變だよ西川さん、たゞ口でいふ汝さんの十萬圓とは違つてるぜ、金山か土山か木の山か知らないが随分、長らくの間この耳へ蒼蠅く聞き飽きた汝さんの十萬二十萬は全體、さても其後さるほどに、どうなりましたい、え、西川さん、もしまだ影も形も無きやア今後いくら口から出かゝつても、ぐつと腹の底へ呑み込むか奥歯で噛み殺すか、兎も角も差控へた方が宜からう、いよくこの長屋に本物の十萬圓が在らつしやるんだからね、大浦商會といふ清韓貿易の御主人だ、この朝鮮髯と淺からぬ交際も自然の因縁だ、はゝゝ、恐れ多いが、そつと聞かしたかつたね、その十萬圓の借金取が辯護士を連れて押掛けた奴を、鼻息で吹き飛ばした大將の勢

ひ、とても凡人業ぢやアないよ、せめて五十萬圓ぐらゐなら、美事に踏み倒してやるが、それツばかりの目腐れ金、きれいに拂つてやるから取つて仕舞へとは西川さん、どうだい」

「ふむん」

「ふむんで濟むかね、も少し何とか感心の仕様があつたもんぢやアないか、や、ちよいと隣屋の石作さん、何、不在、残念だな、あの石作また何のため、こんな日に狼狽へて出歩くんだらう、つまらない人間だよ」

をりしも歸り來りし熊公、おもはず歩を停めて差覗きぬ、

「八卦よい屋め、また何か咽喉笛を鳴らしてるな」

「やア熊さん、遅かつたよ、なぜ早く歸らないんだ、この幸運齋、事に依ると今夜から淺草へ出ないかも知れないよ、かの御大將は正しく龍頭の金鍬形に緋緘の大鎧だ、

は、は、は、疑はしくば細君に聞いて見るが宜い、壁一重で手に取る如く今朝の一件を知ッてる筈だからね」

「そいつア豪氣な有卦に入ッたよ、しかし、いよくさういふ大將とすりやア、狐更のこツた、うぬが看板髻のあるか無いかも分らず両手で顔を押しへて泣き込むやうな汝ぢやア、まさかの御用に立つめエゼ」

「いや何、あの時は久しぶりの酒に酔ッて居たからさ、大丈夫、これでも眞面目に使へば天晴れ物の役に立つべき男に出来てるよ、同じ長屋中でも別して心易く氣の合ッた熊さんだ、必ず力になるよ」

「は、は、は、有難エな、朝鮮髻が八卦よい屋を廢めて熊が辻俤に出なくなりやア、この長屋の入口に冠木門が建つだらう、は、は、は、」

一日の汗水といへど、浮世の辻待に轆棒を握る熊さん、その汗水も運よく客あればこそ、なくば水漬に空腹の境涯、おのが脛を飛ばして稼ぐよりは今日も貧乏神の足早に追ひ抜かれて、やうく三十錢あるか無しの財布を抛け出しぬ、

「おい鼻ア、それだけだい」

良人に連添ふ縁よりも貧に連添ふ縁の深い女房、さりとは泥溝板を跳ね返す裏長屋に名物の喚き聲もなし、

「なアに良人さん、幸ひ晝飯の残餘で、どうか斯うか妾の分はあるからさ、ちよいと二合ばかり買ッて來ませう、氣の毒だよ、この四五日は大旱で一雫も、お潤澤がな
いからねエ」

「こん畜生、また妙な事を吐しやアがるぜ、考へて見ろい、うぬばかりに足らねエ冷飯を搔ッ喰はして、この乃公が傍で、小熱い酒を飲めるけエ」

「だから妾が平常に、いふんだよ、内職にマッチの函でも張るか楊枝でも削らうかとさ、それに良人さん、それもさせないんだらう、どこの世界に辻待の鼻アが手を空けて惘然してるものがあるかね、外聞の悪い、せめて三度々々、満足に炊事の用でもありやア兎も角」

「べらほうめ、三度の飯を満足に炊きたけりやア、離縁を遣るからな、おさんどんにでも出ろい、この貧乏ア今更ら始まつた根の浅エ初心な貧乏ぢやアねエぞ、前世からの深い約束だ、第一また鼻アに内職さすくれエなら髪結か産婆の亭主にでもなつて懐手で暮さア、ぐづくいはずに畜生、それだけの米を買つて来やアがれ」

「ほ、ほ、ほ、色男だね、妾に御飯炊に出られても、良人さんを遊ばしく置く髪結や産婆さんは無からうよ、ほ、ほ、ほ」

「は、は、は、なるほど、さう聞いて見ると少々覺束ねエやうだな、ぢやア汝も飯炊に出さず乃公も當分まつ色男にならず、この錢で何か暖けエものを喰はうよ、は、は、は」

「何、聞いてから覺束ないもんか、聞かなくつても確實だよ」

「念を押すない」

「いえ、かういふ時に念を押して置かないと、間違が出来るよ」

「は、は、は、どうか生涯に一度、そんな間違に出喰はしたいもんだ」

「しかし良人さん、世の中は廣いからね、さう諦めなくつても宜いよ、まだ好奇心な茶人の髪結や産婆さんが、ないにも限らないさ、ほ、ほ、ほ」

「馬鹿にするない」

壁越の隣屋より大浦卓三、例の音太き聲に床板も響くばかりの高笑ひ、

「は、は、は、は、は、面白く夫婦だな、聞いて居ても心持が宜いよ、どうです、失禮だが、今夜、一杯さしあげたいね、實は淋しくつて困つてるんだ」

熊さん思はず振り返りて、見えねど頻りに會釋しながら、自己が額を叩きぬ、
 「とんだ事を旦那、お聞かせ申しまして済みません、どうも下司ア仕様のねエもんで
 すよ、こん畜生、だから靜にしろといふんだい」
 「細君に小言は入らないよ、は、は、とところで、どツかへ出かけても宜いが、こゝで
 飲む方が洒落てるだらう、御苦勞だが、萬事、整へて來て貰ひたい」

黒ビール三本に大林橋五個と一升徳利に鮪の刺身一皿を携へながら、熊さん勢ひ込
 で歸り來れば、待ち受けし大浦卓三、酔はぬ前より手を拍ツて満面の微笑を漏らしぬ、
 「さア、ビールと林檎は此方だ、其方は飲めるだけ飲むが宜い、その一升到に限らない
 よ、肴も何故そればかり取ツて來たんだ、細君の分が無いぢやアないか」
 「なアに旦那、勿體ねエ、これで結構でさアね、總體で二圓と五錢ですから、五圓で

二圓と九十五錢お剩餘を」

「いけないよ、細君にも何か取ツて來なくツては、よく出來た細君だ、まア剩餘は其
 まゝにして置くさ」

熊さん眼を剥いて俄の大聲、

「やい鼻ア、な、何をしてやアがるんだい、この罰ツあたり女、ぐづくすると叩き
 擲るぞツ」

大浦卓三、二十貫目の大兵を後ろ手に反返ツての高笑ひ、

「はッはッはッこりやア酷い」

さらぬも出かけし女房、慌て、表障子の闕際に小腰を屈めながら、そツと片寄りつ、
 身を縮めての挨拶、

「とんだ御馳走さまで、まア恐れ入りました事、いえもう貴君、かやうな柔體を致し

て居るもんで御坐いますから、つひ御酒を戴くと何某様の前でも、ほ、ほ、ほ、いくら
旦那が飲めと仰しやつても良人さんまた圖に乗って、うかく過ぎちやア不可ない
よ、をかした調子にならない前、早く御免を蒙ってね」

「は、は、は、大切な御亭主を二三時間、ちよいと借りるよ」

「どうせ手前にあつても用の足りない、まことに粗末な亭主で御坐いますから、お貸
し申す事は此まゝ生涯でも、イツそ差上げた方が助かりますが、すぐ御小言を頂戴
するに極つて居りますよ、ほ、ほ、ほ、そろく妙な酔工合になりかけましたら、御遠
慮なく御叱り遊ばして」

また身を縮めて其まゝ立去る姿を、大浦卓三、おもはず見送りて猶更ら興に入りし體、

「自然と愛敬のある氣輕な世話女房になつてるよ、好い細君を持つて幸福だ、大事に
しないと不可ないよ」

「じよ戯談を、旦那、腐れ縁で今更仕様がねエから堪忍して居ますもんの、幸福とい
やア餓鬼を放り出さねエのみのこつてすよ、あれで旦那、世間普通に満足な女を見
習つて、もし生意氣に子でも産み出しやアがツたら、それこそ無事ア置けねエ阿魔
でさアね」

「こりやア驚いた、何と挨拶して宜いか分らないね、外に不足もあるが子を産んだか
ら仕様がないと、いふのが世間普通の正當だぜ、は、は、は、しかし面白ところがあ
るよ、かういふ夫婦で急に言葉が改まつたり、いやに尋常めいちやア却つて不祥だ。
いつまでも末長く其まゝで遣つて貰ひたい、どうも當時は口先ばかり綺麗で腸の
腐つた奴が多いから困るよ、は、は、は、さア飲んだく」

いちくランプに石油を注すも面倒なりと洋蠟を舶來の手燭に立て、旅行用のコッ
プもナイフも鞆の中より取出しながら黒ビールに林檎の下物、人間が大浦卓三、いか

にしても八軒長屋の九尺一間に不相應なれど、一升徳利の口より湯呑茶碗に注ぎ込んで、鮪の刺身に舌鼓を打ち鳴らす熊公、これがこの境涯にあるべき極樂の絶頂、月に一度は儲置いて年に幾度といふ手柄話の種なり、

「旦那、世の中といふものア段々で、人間の出来工合にも、いろくあるもんで御坐いますなア」

「むづかしい事を言ひ出したね」

「だつて、さうちやアありませんか、失禮ながら旦那も、わたしも同じ人間ですぜ、それに何故、かう手荒く違つてるんでせう、第一まア早い談話が現在これですからなア、二合も覺束ねエ豆ランプ一個の石油が、をりく切れて無くなる眞ッ闇な中で空腹を堪忍する人間と、まッ白な西洋蠟燭を苧殻のやうに燃し立て、さ、掘抜井戸の底も知れねエ奴に酒を下すつて平氣な人間と、客な事をいふやうですが旦那、

その林檎が一個で八錢たア驚きましたね、五個で五八の四貫だ、チャンくの交らない日本米が二升ですよ」

「おいく、つまらない事を言ひ出しちやア困る」

「いえさ、戴いた酒に酔つて巻くンぢやアないんですが、どうも不思議だ、變だと思つたところで旦那ア、やはり旦那だ、ね、申し上げて善いか悪いかア存じませんが、鼻アに聞きましたよ、大層な御身分で、この熊なんかア砂利の數でも數へ切れねエお金のこつて暫時、かういふ、うす汚ねエ裏長屋へ洒落に來て居らツしやるんださうで」

「は、う、う、定めて聞いたらう、あ、いふ念の入つた大貧乏でね、家は差押へられる、妻子は他へ預ける、たゞ身體だけ、やツと無事に遁け出して來たのさ、どうして洒落に來るもんかね、實は大心配で、手も足も出ない苦し紛れに、ほツとして來たの

くないところが妙だ、わかし、人間だよ、は、は、は、は、

「お言葉に付くンぢやア御坐いませンが、彼奴も旦那、どうか呼んでやッて下せエな、あれでも根に悪氣のねエ奴ですよ、第一この熊よりも前に御酒を戴いた事のある奴ですから、かういふ時に一人占は可哀さうです、彼奴、きツと恨んで泣きますよ、は、は、は、は、」

大浦卓三、おもはず首肯いて、我手に持てる黒ビールを一口に乾しながら、そのコツプを差出しぬ、

「辻傳を曳かすには惜しく出来てるよ、さアこれで飲んだ」

年ごろ二十七八の丸髷、小荒き大島紬に黒縹子の丸帯、同じ大島ながら風通めきし變り縹の羽織、加之も身に馴れて一切これが常着の風情、くツきりと色白の細面の目鼻

立の冴え渡りし美人、まづ往來の絶え間なき萬人の蒼にも一日に一人あるか無しかと思はるゝ背後より、ふツくりとせし十八九の高島田、偕また一段すぐれて水際の立ちし娘、これも常着の銘仙に半襟かけて、聊か流行に後れたれど晴の帯でも無いだけに猶更ら床しき紫地の小柳縹子、さりとして目立たぬ襦袢の奥まで一點の木綿氣なき自然の柔かさ、どこやら假たる顔貌は問はずとも姉妹ながら、その姉を以て天の生せる名花一輪、うかく歩けば此まゝ寫眞盜賊に撮られて、文字の内容よりも當時これなくは賣れぬといふ文學雜誌の口繪に偷まれさうなり、

いづこに俤を待たせしか、わざと姉妹ともに足早の歩調、八軒長屋の入口に立寄りながら、はツと思はず今更の顔を見合せつゝ、また頻りに四邊を振り返りぬ、
「あら姉さん、こゝですの、間違ッては居ますまいか、誰か連れて來れば宜う御坐いましたねエ」

「こゝですよ、こゝだといふ事を委しく書いてあつたから、しかし、ちよいと聞いて見ませう」

「あら姉さん、すたく一人で奥へ這入ッて仕舞ッては嫌ですよ」

「ほ、ほ、氣の弱い女だね」

「だッて妾」

「そんな事を言ッて、姉婿に濟みますかね、平常とは違ひまへよ」

妹を外に置いて、そツと入りし左側は慾の外に眼のない石作なれど、生憎右の表障子

この中の本尊は例の色狂者、優しくいへば自己が師匠の女房にさへ手を握ッて長煙管の極印うたる、奴、わけて此ごろは女に對つて病犬よりも危い花野露雄なり、

「御免下さいまし、失禮ながら、ものを伺ひたう御坐いますか」

をりしも肱枕に兩脚を伸ばして寢轉びつゝ、これを立身出世の虎の巻と心得て爲永春

水の梅曆に夢が夢中の露雄、一つ二つ脊骨を喰はしても氣の付かぬ奴ながら、恐ろしや女の一聲は忽ち五臟六腑に沁み渡ッて電氣作用に等しく、はツと振り返り、そツと差覗き、ごそくと這ひ出して、恥づかし氣もなく丹次郎これにありとの面、表障子を引開くれば米八を上品にせし女振を一目みるや否、はや既に脳味噌を搔き亂されて度を失ひぬ、

「はてね、お見受け申したやうだが、つひ數の多い中ですから」

「ほ、ほ、いえ、さやうでは御坐いません此お長屋に大浦といふ、ものが居ります筈で、まゐりましたが」

「は、なるほど、大浦さんは居られますよ、さやうくこの奥です」

「奥の、どの邊で御坐いませう」

「お待ちなさい、は、只今、大浦さん、よろしい、大浦さん」

そのまゝ飛び降りて下駄も忘れながら、また振り返れば丸鬘の背後に一人、お蝶を現出の娘が會釋の美容に、あはれや色狂者、ほつと上氣せあがりぬ、

「まア兎も角も、お掛けなさい、大浦さん居るか居ないか、見て来て上げますから、

さア御遠慮なく」

隣屋より不意に飛び出したる朝鮮髻、狼狽へし花野露雄を横合より突き倒しぬ、

「どうか貴女方、其奴に構はす此方へ、拙者御案内」

姉妹二人の美人を大浦卓三の罫へ送り届けて、ほしやくの朝鮮髻を捻りながら、まづ今日の手柄顔に立出つれば、突き飛ばされし色狂者、おのれの自由の女でも無いに掌中の珠玉を奪はれし如く、眼を剥いて怨恨の喧嘩腰に待ち受けぬ、

小男なれど、いざ摺み合となれば二十三四の相手、まして女の事には前途自棄の執念深い奴に、ひよろくの朝鮮髻は今年四十八の骨と皮、こりや堪らぬと俄に凹垂れし

が、ふと思ひ出して幸ひ熊公の許へ飛び込みぬ、

「八卦屋さん、大變な御客様だね、ありやア御新造だらう、一人は御妹御か何かだね、

芥溜の鶴とは此こつたよ」

「眞實だ、かういふ時に熊さんが居ると宜いにさ、しかし細君、氣を付けてね、どうせ御用があるだらうから頼むよ」

「あ、承知してるさ、如才なく後で伺つて見るからね」

「時に細君、そら去年の冬だったね、あの色狂者め、心中の眞似を爲損つて長屋中に差出した謝罪證文、熊さんの手許へ預けてある筈だ、ちよいと出して貰ひたいね」

「何をしなさんだ、いえさ、あるよ、書いたものは外に無いんだから、すぐに分るがね」

「や、有難い、至急入用の儀が出来たんだ、濟めば持つて来るから」

これさへあれば大丈夫、おのれ馬の脚めと飛び出せば、もはや待ち兼ねて塙へ入りし體に朝鮮髻また我巢へ這ひ込みながら、壁一重を隔て、機先を制しぬ、

「どうです花野さん、世の中には随分と珍らしく、思つたよりは美しい女のあるもんですな、わけて年の若い高島田の方は晝に描いたやうですぜ」

いへども寂として何の手應なし、

「花野さん、まさか不在ぢやアあるまい、どうしましたい、え、露雄さん、は、ア聊か御立腹の様子だな、そりやア考へ違へだ、いやさ怒らなくつても宜い事があるよ、面影の變らで年の積れかし、さて年は取りたくないね、折角この幸運齋が案内をしたに、あの高島田が妙に後を振り返つて、汝さんの名を聞きましたぜ、流石に俳優人だ、夜露に曝した五十近い賣卜者よりも、自然どツか垢ぬけて目に立つと見えますな、あれこそ主なき花の娘だ、歸りがけを待ち受けて握れば、きツと出來さうだ

よ、長煙管も持つて居らないやうだから、これは失禮、は、は、は、しかし問うたのは眞實だ、好いたららしい男ね全體ありやア何といふ人ですツて、は、は、は、」

こゝまで買ひ出せど、そのまゝ一言もない不思議さに、拍子ぬけの朝鮮髻、おもはず小首を傾けし折しも、はや表障子の入口より面相を變へて現はれ來りし敵の姿に、かけ辨慶、はツと驚いて懷中の謝罪證文を取出すや否、狼狽へて勸進帳を讀み上げるが如し、

「どツこい、うかく這入れないよ、怨敵退散、これだく、私事身分の程も辨へずお長屋の諸君方に對して色男になりたき一心より、いやまだ奥に一段、面白い個處がある筈だ、そら出た、今後いかなる場合に立至り候ともウツカリ女の事は口より出すまじくさ、どうだね、は、は、は、別して隣屋の幸運齋先生様に對し奉りて頗る恐縮の至りに奉存候以上といふ添書があるよ、は、は、は、」

大浦卓三、どこまでも斯の如く出来たる男なれど、流石に妻は女氣の今更に羞俯いて涙ぐみつゝ、連れし妹もろとも思はず袖に眼を押拭ひぬ、

「まア良人、いくら何でも、何故こんなどころへ、まさか、これほどで無いと思つて居りましたに」

「は、は、は、なアに宿屋住居したつて、汝方と同棲に居たつて、第一あのまゝ、店に坐り込んで居つても或期限内までは差支ないのだがね、これには少々理由のあるこつたよ、いづれ後で分るさ、しかし、よく来たね」

「よく来たつて良人、平生の御氣性を存じて居ればこそ、お手紙のあるまで、じつと辛抱が出来たんで御坐いますよ、さうでなくつて一月も、考へて御覽なさいましたな、やうく二歳になつたばかりの坊でさへ、片言交りに、お父様は何處にツて良人、

をりく／＼思ひ出して探すんですもの、妾、堪りませんよ、母も良人、どんなに心配いたして居りますか、この妹だつて此ごろは、ろくに外へも出ませぬくらゐで「いや、汝方の阿母にまで心配かけて濟まない、だがね、今に乃公が一工夫あるんだから堪忍してくれ、ね、たとひ城は落ちて、十萬や二十萬の金で此まゝ、斃れる大浦卓三でないよ、しかし鶴ちゃん、姉さんのやうに、かういふ身體ばかり大きい御亭主を持つと不可ないぜ、なんでも物事に神妙で正直な律義な、そして丁寧に失策のない男振の好い氣心の優しい旦那様を持ち當て、貰ひたい、は、は、は、は」

「あら、姉さん、妾、一人で歸りますワ、折角来たのに」

「こりやア悪かつた、は、は、は、戯談だよ、は、は、は、は」
「何ですよ良人、どうして、まアさう暢氣になれるんでせう、こんなところに在らして、只お一人で、よくまア今日まで、わけて贅澤な良人が」

「何、少しも不自由は無いよ、人間といふものは二人以上で物が足りると却って不自由だが、かういふところに一人で居ると實に氣樂だ、保養になるね、腹が減れば近所へ食ひに出る、用がないから其間は毛布を被って大の字に寝る、淋しくなれば、をりく長屋の奴を相手に面白い談話を聞くね、まるで別世界だよ、今に一件が落着いたら汝方も二三日、来て見るが宜い、は、は、は、は、」

「困りますねエ、全體、いつまで良人、こゝに斯うして在らっしゃるんです、そして妾等、此後どう致せば宜しいんで御坐います」

「なるほど、さう切り出されると笑つても居れないね、つまり、もう三日で京橋の方が一段落の告げるよ、いや、心配するに及ばない、その一段落に就いて乃公の工夫がある筈だ、こゝに今日まで居った効もあるんだ、ね、ところで汝方、やはり當分そのまゝ芝の阿母の家で厄介になつて居るが宜い、たとひ乃公は、どう潰れても、

汝の名に付けて置いた財産は別だ、彼奴等に指一本も觸らせないからね、どうか斯うか着て喰ふぐらゐるの事は生涯まづ安心だ、亭主は商業上に倒れても妻子眷族の家庭まで斃す乃公でないさ、氣を丈夫に持つて斯ういふ時にこそ寄席へでも演劇へでも行けよ、しかし、また一週間こゝへ來る事はならないぞ、店員の奴にさへ固く言ひ含めて來させない乃公だから、さう度々、汝等に逢つては不可ない、たゞ坊を大事にしろ、あれが二代目の大浦卓三だ、わかつたか、阿母に宜しく言つてくれ」

右といへば右、左といへば左、いよくかうといへば動かぬ筈の良人に諭されて、さらぬも平生の氣性を知りぬきし妻、あとに心は残りながら、すごく妹もろとも立出でつゝ、そつと朝鮮髻の髻を差覗いて小腰を屈めぬ、

「只今は有難う御坐いました」

八卦よい屋、はつと飛び出して、俄に眞面目の慇懃さ、

「どう致しまして、わざわざ恐れ入ります、大浦さんには近ごろ別して御懇親を願つて居りますもので」

「何分あゝいふ人で御坐いますから、此上とも宜しくお願ひ申します」

「とても及びませんが、かやうな裏長屋には萬事お馴れなならない方ですから、また拙者ども相應の御用は」

「お隣屋の方へも、御挨拶いたす筈で御坐いますが」

「いえ何、隣屋の奴、はゝゝゝありやア貴女、うかくお言葉を、おかけ遊ばさない方が却つて、實は少々、氣の變な奴で御坐いますよ、はゝゝゝ」

「入らざる事まで饒舌り立てつゝ、長屋の外まで送り出しながら、ほしやく鬚の骨と皮でも生きた人間、今更姉妹の後姿に暫し其まゝ立停まりて、うつとりせし折しも、ちらと振り返られて、はつと驚き、慌て、俄の會釋もろとも飛び込めば、破れ障子の

内より花野露雄、

八卦屋さん、ちよいと待つて貰はう」

朝鮮鬚、わざと平氣の體ながら、實は聊か薄氣味わるし、

「西川さん、石作さん、お在宿でせうな、時に花野さん、何か御用かね」

「用があるから呼んだんです」

「なるほど、西川さんも石作さんも今、この俳優さんの用が濟んだら急に御相談したい事があるから、どこへも出ずに居つて下さいよ、さて色男、全體どういふ用だい、何、這入れ、はゝゝゝ近所の交際だ、呼ばれて歩は停めるが、わざ／＼御膝下へ呼び込まれて承る用は無い筈だ、また先刻の謝罪證文一札でも讀めといふのかね」

「外の事は兎も角、この花野露雄は何故どこに氣が變だ、うかくお言葉をかけるなどは八卦屋どういふ理山だ、こりやア證文の外だよ、さア聞かう」

「は、は、は、何の用かと思つたら、その事かね、ありやア汝さんの爲を思つて言つたんだよ、いえさ相手が御婦人で加之も容色が彼だもの、もし妙な工合に氣でも遠くなつた拍子、どんな間違がないとも限らないからね、危険だよ、萬一の事があつちやア大浦さんに濟まないよ、去年の冬だつたか、折角あゝいふ結構な卦が出たから、運を握つて放すなといへば他の女房の手を握つて長煙管の雁首を頂戴するやうな汝さんぢやアないかね、は、は、は、」

一時間の前には例の謝罪證文一札に追ひ歸され、今また長屋中に恥辱の上塗せられて、いかな奴も黙つては居れぬ場合、さりとて口では叶はぬ無念の口惜し紛れに表障子を突き倒すや否、こればかりは田舎演劇で馴れたる早業、無言の唐突に飛び出して朝鮮髯に喰ひ付けば、きやつと叫んで遁けも得せず、

「西川さん石作さん、この野郎、痛い、たゝ助けてくれッ」

朝鮮髯と色狂者が攪み合の喧嘩に、西川と石作が飛び出しての仲裁、いかなボンチ繪にもない圖なり、

やう／＼左右に引き分けて西川は花野露雄を其塙へ押し込みつゝ、石作は朝鮮髯を我塙へ連れ込みつゝ、その顔を見れば、青く瘦せこけたる頬骨の上を赤く二筋も搔き撈られて、水を放れし寒鮒の如く、ふツ／＼と息切れの體なり、

「どうしたもんだね、つまらない、あんな青二歳を相手にしてさ、年齢と髯に對しても考へるが宜い、お互に自分の女を取つたでも取られたでも無いぢやないか」

「いや、それは兎も角、けしからん野郎だ、彼奴、此まゝでは無事に濟まされない、今に熊さんが歸つて来りやア篤と相談して」

「は、は、は、篤と相談も何も入らないよ、どツちかと言やア、實は君の方が善くないさ、わざ／＼喧嘩を買ひ出したやうなもんだからね」

「石作さん、仲裁は有難いが、さう言はれちやア困るよ、何も拙者が、わざく〜好んで」

「まア宜いさ、どうなつたつて長屋中で相手の肩を持つ者は無いよ、しかし怪我が無かつたかね、すぐ飛び出して引分けたが随分手酷く遣られたやうだぜ、も少し遅けりやア大變だ、おもはず助けてくれと言つた聲が、よほど苦しうだつたぜ、は、は、」

「何、さういふ事を言つた覚えは無い、そりやア彼奴が苦しまぎれに出したんだらう、意氣地のない奴だ」

「は、は、は、どつちだか聲で知れるよ、第一あの場の様子ぢやアとても顔の蚯蚓膨れぐるんで治まりさうも無かつたぜ」

「え、蚯蚓膨、どこに、拙者の顔、や、あの畜生、酷い事をしやアがったぞ、なるほ

ど痛いよ、さア承知しない、石作さんこの仲裁は不服だ」

「おい〜どこへ出るんだ、今こゝで止まらなきやア止めないぜ」

「なアに止めなくても宜い、止めて貰つちやア迷惑だ、あの青二歳め、いよく〜今度こそ本氣の沙汰で拙者が腕を見せてやるんだ、かういふ時に幸ひ取つて置きの臍魂を出してやらないと今後が面倒だ、癖になるよ」

黙つては飛び出さず、わざと大聲に叫びながら、石作の堪を餓鬼人形の如く躍り出せば、花野露雄を押へて立出でし西川に抱き止められ、實は願つたり叶つたりの朝鮮舞、ますく〜生きり出しぬ、

「放した、西川さん放してくれないと後で恨むよ西川さん、平生の幸運齋と聊か違つてるんだ」

「これさ、何をするんだい、馬鹿々々しい、やつと一方を治めて來たんぢやアないか、

それに五十面さけた方から、また盛り返しては困るよ」

「いや五十面さけたものを彼奴、馬鹿にしやアがるからだ」

「わかッてるよ、わかッてるがね、さう跳ねッ返ッちやア腹が減るよ」

をりしも長屋の入口に車を飛び降りながら、驚いて立寄りし八字髭は大浦卓三を訪ひ来る例の黒川といふ辯護士、それと見るや否、

「やア西川さん暫く中止だ、喧嘩よりもお客様だ」

そのまゝ西川の手を振り切ッて、すたくくと奥の方へ御注進々々々、

いよゝゝ浮世の落城に三日を餘せし大浦卓三、七人の包圍攻撃に采配を打振る黒川辯護士と、今この八軒長屋の九尺一間を軍門と定めての談判、城を枕に討死するか圍みを解いて和睦するかの境目なり、

「大浦さん、お互に今日は打ち解けて、所謂胸襟を開いて、かゝる場合には最も多く用ひらるゝ権謀とか術数とかいふ一切の駈引を去ッて仕舞ッて、つまり事の結果に必要な點のみを加之も露骨に簡單に御相談せうぢやアありませんか、實は債權者の方から度々かう歩を運んで來るといふのが、既に一步を譲ッた證據で、もはや貴君に充分、内兜を見透されて居ますがね」

「はゝゝゝさういはれると困りますが、お言葉に依ッて露骨に簡單に、うち解けて駈引のないところを申せば、いかにも失禮ながら債權者の腸を見ぬいて居ますよ、黒川さん、この大浦卓三に兎も角も競賣期日の延期を願ひ出せとの事です」

「さやう、多少の不利益を覺悟の上で今日、伺ッたのは眞實その事です、大浦さん、無論、延期を望まれるでせうな、まさか競賣を喜んで待たるゝ筈は無いでせうな、それとも意外の點に呼吸のある貴君だ、如何ですな」

「こりやア黒川さん、聊か皮肉ですね、致方ないから觀念したので、何とか其間に致方があれば、わざわざ好んで誰が自己の亡ぶのを待ちますかね、半殺しにされた蟲でも寸隙さへありやア逃げ出しますぞ」

「は、は、は、どうも大浦さんは談話が巧いから、うっかり餘談に乗れない、は、は、は、それでは萬事、あらためて、ゆる／＼また雙方のために善後策を講じませう、差當つて今日のところは、三日後の競賣に延期届を出して下さい」

「まづ一安心だ、有難い、もとより喜んで出します、どうか債権者の諸氏に貴君から宜しく」

「承知しました、その邊は如才なく傳へて置きますが、儲かうなると却つて妙なもので、往々かういふ工合に主客の勢ひが顛倒して來ますよ、は、は、は、負債も程度問題で大きく出來ると面白いですな、勿論、其人の信用代價ですから、いよく事實の

不結果を來すまでは借金も財産の部ですよ、この様子では大浦さんも目出たく財産の部に歸ませう」

「なアに黒川さん、借金して居ながら斯ういふ傲慢な奴ですからね、實は憎しみの餘り、一氣に潰さず長く苦しめて見物せられるんでせう」

「さう取つては大浦さん、いけませんよ、しかし只今の延期届は認めて來ましたから、これへ御自筆で調印を」

「なるほど、また二週間の猶豫をして下さるんですな」

「さやう、三日後の二週間ですから、よほど御工夫の餘地がありません」

「ところで、黒川さん、こりやア此ま、無條件ですか」

「世間の例に依れば四十日も延期した後また二週間ですから、とても無條件では無効です、滞納の利子だけを入れるとか全額の幾分を差出すとか何とか、いづれ必ず相

應の實行を伴ふべき筈ですがな、及ばずながら黒川が債権者を説いて、貴君のため實は大に盡した覺悟です」

「黒川さん、とんだ間違ひだ、債権者の方へ取られる條件で無い、此方へ貰ひたい條件だ、この延期届の調印は無償ですか、負債のうち幾何を引去るとも何ともなく只こゝへ調印するのは少々考へもんだ、大浦卓三、お氣の毒ですが、ちと出来兼ねますよ」

流石の黒川辯護士も、あつと呆れて暫時その顔を打守れば、二十貫の大兵肥満、のツしりと悠然たり、

主客の勢ひも事こゝまで顛倒しては、もはや言語道斷の至極ながら、たゞ呆れても居れぬ黒川辯護士、おもはず膝を進めて容を改めぬ、

「大浦さん、只今の御言葉は戯談ぢやア御坐いますまいな」

大浦卓三、どこまでも平然として悠々たる體、加之も満面の微笑、

「この際に黒川さん、何、戯談が言へるもんですか、四十日も競賣の延期した後また更に二週間の延期で加之も無條件といへば、なるほど、いかにも世間に例のない寛恕な債権者でせうが、そりやア世間に例のある尋常の債務者に對つて誇るべき事だ、この大浦卓三には少々、恩の着せ工合が違つて居ますよ」

「ますく、以て、けしからん」

「は、は、は、黒川さん、貴君も當時の辯護士中では最も談話の早いといふ評判の方だから、つまらない餘計な事は饒舌りませんがね、二日以前あの坂上さんと同道で來られた時よりは、この大浦に對する債権者の形成が一變した筈だ、神戸邊から俄に誰か加入したものはありませんかね、は、は、は、あるでせう、日取を考へて見ると恰好昨日あたりだ、金額は一口で六萬三千七百圓、どうですな」

「大浦さん、實に貴君ア偉い、この黒川も随分これまで種々な人間に接して、いろんな混み入った事件も扱って見ましたが、まづ貴君のやうな大膽で周到で意地の強い底の深い人には始めてだ、あれだけの立派な商店を一時に差押へられたまゝ慌てもせず平氣に妻子の方を他へ預けて自分は斯ういふ裏長家へ濟まし込んで、加之も債權者に其後たゞの一度も歩を運ばず、寧ろ呼び付けて、いよく競賣期日の間に突然と一大堤防を築き出した手腕、實に驚きましたね、いかにも神戸の清商で葉昌永といふ者から不意に六萬三千七百圓の破産申請が出ましたよ」

「はゝゝゝ出たでせう、出る筈だ、いや出せと言つて遣つたんです、しかし黒川さん策略でないよ、大浦卓三は男です、よく世間にある一夜細工の卑劣手段でない、こりやア今度の債權者よりも以前の取引上から出來た債務で、その年月と一切の證據書類を見れば分りますよ、正しく六萬餘圓の舊債だ、法律上の事は知らないが、徳

義上からは貴君の扱つてる分を儲置いて支拂ふべきモンです、七人の債權額が十三萬餘圓で財産競賣の見積りが二萬内外の不足といふ一昨日の御言葉でしたね、すると前後差引、こりやア大變な御迷惑を、かけねばならない勘定だ、はゝゝゝ笑つては濟みませんが、どうも致方がない、第一あの神戸の葉といふ清商は、なかゝ腹の太い奴でね、どこが氣に入つたか、多年この大浦卓三を頗る買つて居てくれましたよ、だから六萬や七萬では商店の機關を差止めて自己も損をするやうな、そんな目先の見えない馬鹿な事はしない筈ですが、あまり此方の火の手が厳しいからね、實は灰にならないうち本人の卓三から委細を言つて遣つて至急かうしろと頼んだのです、強ち七人の債權者に堤防を築いた理由でもない、つまり葉の權利に對する當然の義務ですよ、しかし以上の始末は兎も角、延期は有難い、あらためて二週間の調印をしませう、否、さして戴かう、なアに最初に打明けて神戸の事を聞けば、す

ぐ喜んで調印もしたんですがね、互に一切の駈引なく胸襟を開いて相談しようといふ、その貴君に多少の駈引があつたから聊か癢に觸つて、ちよいと、ふざけましたのさ、は、は、は、貸した奴より借りた奴の威張れる道理があるもんですか、黒川さん何分この上とも宜しく願ひますよ」

兀として頑たる中に油を流せし如き圓轉滑脱、どこが五體の急所やら更に知れざる男なり、

七人の債權者に圍まれ十三萬圓の借金を脊負ひ、財産は差押へられ妻子は他に預けて身は棟割長屋の奥に落ち込んで、食はねば生きて居れぬと笑ひながら、例の黒川辯護士に一泡吹かして追ひ歸せし後、また悠々閑々ぶらりと夕飯に出る大浦卓三、絲瓜の中に鐵丸を仕込みし如き男なり、

加之も案外の世辭愛敬、まづ出がけに隣家を差覗いて微笑を含みぬ、

「は、ア御亭主まだ歸らないね、細君、をり／＼壁越に嫌な事を聞かして、お氣の毒だね」

「どう致しまして、お客様と存じましたから何か御用を伺ひに出る筈で御坐いますが、うろ／＼妾どもは却つて、ほ、ほ、わざと差控へて居りますので」

「は、は、は、なアに當分、客待遇をするほどの奴は來ないさ」

笑ひながら其隣屋の朝鮮髻を差覗きぬ、

「八卦屋さん、お在宿かね」

「は、居りまする」

「居りますは宜いが、先刻は全體、どうしたんだ、猿でも絞め殺されるやうに、きやツ／＼と」

「や、御承知なンですか」

「聾は居らないよ、この長屋で、あの大きな聲だ、飛び出しても仕様がなから黙ッて居たが、どうか以後は、あゝいふ事で喧嘩して貰ひたくない、やるなら自分の事で死ぬか生きるかの摺み合をするさ、その時こそ面白く見物に出るよ」

「恐れ入ります、いえ何、さういふ理由では御坐いません、つい事の行掛りで、實は隣屋の奴が」

「隣屋の人は、どうでも宜いよ」

「しかし後奴なかく、危険な奴ですから、もし奥様や御妹御に萬一、間違ひでもあらうかと存じまして」

「おい／＼困るな、それが此方の迷惑だよ、はゝゝ、兎も角も一應、何とか隣屋へ挨拶を、しなければならぬ」

「ど、どうして貴君、さういふ事をなすツちや隣屋の色狂者め、圖に乗ッて何をするか知れませんよ、うかく／＼なさると御妹御を嫁にくれなンか、言ひ兼ねない奴ですま、そりやア御關係なさらない方が宜しい、ねエ西川さん石作さん、これまでの例に證據人が居りますよ」

「喧嘩の止め手に呼び出さしたり證據人に引出されたり、はゝゝ、近處が災難だ、なアに女は縁次第、欲しいと言やア随分、遣りもするさ、どうせ生涯あのまゝの娘でも置けないからね、どうだ八卦屋さん外に先約さへ無きやア、いッそ汝さんが貰ッてくれないか、妹に限らない、妻女でも相談に乗るよ」

流石の八卦よい屋、ぐうの音も出ず、ごそ／＼と吊戸棚の下へ這ひ込めば、大浦卓三高笑ひのまゝ、隣屋の花野露雄が入口へ歩を運びぬ、

「この奥の大浦です、つひ機會がなくッて今まで親しく談話ませんが、先刻は女ども

尋ねてまるツた節、いろく御面倒でした、しかし、それがため、とんだ事になりまして、は、は、は、お閑暇の時お遊びに来て下さい、さのみ遠路でもありませんからな、は、は、は、

きくや否、平生さへ自己を忘れし花野露雄、もはや眼も眩んで這ひ出しぬ、

「有難う御坐います、實は前々より伺ひたいと存じて居りましたところで、早速ながら今夜お在宿で」

「ちよいと今、出ますがね、すぐ歸ツて來ますよ、お出でなさい、演劇の方だと聞いて猶更、いろく面白談話があるでせう、は、は、聞かない前から呵しい、はッはッはッ」

いかに一種の病的とはいへ、これは此奴また上氣せ過ぎて恥知らずの哀れに出來たる

厄介もの、例の喧嘩に付いて隣屋の朝鮮髯へ一本まるりしのみか、生涯あのまゝの娘でも置けず女は縁次第、ほしくば遣ると洒落伸めしたる大浦卓三の言葉を木氣の沙汰に受けて、ほつとせし眞正面より遊びに來いといはれては、花野露雄、もはや前後の差別なく、のこくと押掛け行きぬ、

閑暇さへあれば鬼でも蛇でも相手にする大浦卓三、面白ければ猫の死骸も踊らして見る好奇心、まして長屋中へ謝罪證文一札を取られしと聞き及ぶ色狂者、これが俳優かと思へば猶更ら興に入りて、聊か罪な事ながら、さも待ち受けし體に喜び迎へぬ、

「さア此方へ、お互に一家内も同じこつた、遠慮は入らない、うき世といふものは眞面目なやうで、その實は七八分まで熱に浮かされた寢言のやうなものだ、つまり丸いが宜いね、をかしく變に四角張ツても無効だ、は、は、思ツた事は言ふがよし、したい事は爲るがよし、は、は、は、」

「いや、眞實で御坐いますよ、誰だつて腹の底には、いろく、いひたい事や、した
い事があるンですから、相手の方さへ気が大きクツて、心が廣クツて在ラツしやれ
ば」

「なアに廣クツても狭クツても、そんな事は構はない、そりやア先方の勝手で、此方
は此方さ、まづ早い談話が十人に當ツて見て、その中の一人を自分の思ツた通りに
すりやア一割だ、怪しい株券や公債を持つてるよりも、よほど確實で加之も安心だ
からなア、は、は、は、五人で一人出來りやア二割だ」

隣屋の色狂者め、大浦卓三の許へ這ひ込みしと見るや否、坐ても起ツて居られぬ朝鮮
髻、をりしも歸り來りし熊公を呼び入れながら、そツと聲を潜めて眼を剥き出しぬ、
「熊さん大變だ」

「おや、また汝の大變が始まつたね、どうしたンだい」

「どうしたツて、大變だよ熊さん、隣屋の奴め今、のこく大將の御膝下へ出かけた
ぜ」

「宜いぢやアねエか」

「よかアないよ、あの野郎、けしからん奴だからね、うかくあのまゝ、うツちやツ
て置けないさ、實ア今日、喧嘩をして、この通りだ、頬骨の上を搔き拂りやアがツ
たよ」

「は、は、は、よく近頃ア、やられるな、しかし今日は髻でなくツて僥倖だ」

「おいく熊さん、さう落着いて居ちやア困るよ、どうせ彼奴、拙者の事を善くは吐
さないからね」

「彼奴に限らず、誰だつて汝の事を善くは吐さないよ」

「や、これは酷い、力に頼む熊さんまで、その氣で居られては心細いよ」
 「は、は、は、しかし、あの馬の脚め何をいふか、面白いね、わツしの家へ來なせエ、そ
 ツと壁越に聞かう」

大浦卓三が如何なる人物とも知らず、たゞ自己が梅曆の虎の巻より割り出して、あの
 米八を上品にせし如き丸鬚の亭主と羨みながら第一は晝にも描けぬ高島田お蝶に似た
 る娘あれが妹、欲しくは誰にでも遣るとの言葉に猶更ら有頂天の花野露雄、あはれや
 肺病よりも癩病よりも療治の届かぬ病なり、

「甚だ失禮な事を伺ひますが、どうして貴君は何故かういふ裏長屋へ、誰が見ても變
 で御坐いますよ、あまり御人體が違ッて居りますから」

「何、どこが違ッてるもんか、借金のために逃げ込んでるんだから、借金が無くツて

住んでる人よりも大貧乏な理由だ、は、は、は、しかし汝さんこそ目に立つよ、流石に
 素人でないね、まだ若いから修行次第で大立物になれるだらう、なるべく女に惚れ
 られない用心するが宜いよ、男は劔難よりも女難が怖ろしいといふからね」
 「いえ無論その邊は平生から心掛けて、なるべく用心に用心を重ねては居りますが、
 何分、一人身で、かうして居りますと、をりく蒼蠅い事が出来まして、實に困り
 果てますよ」

「なるほど、そりやア、さうだらうな、さうありさうなこツた」

「中には退くに退かれぬ義理と人情に搦まれましたね」

「や、義理と人情、此奴また怖いぜ、つい己むを得ず、いやくながら、引摺り込ま
 れるからね」

「眞實で御坐います、よほど氣強く持ち堪へないと、なか／＼危険です、しかし今日

まで、どうか斯うか切り抜けてまゐりましたから別段、さう間違ひもなく、その代りに随分、いろんな諸方から怨恨を受けまして」

「は、ア、鮑の貝で取巻かれるといふ理由だね、ところで近來は、どこの演劇へ出な
さる」

「さ、それに就いてで御座います、どうも演劇者と申すものは、いくら高尚張ツて改良いたしたところが、やはり演劇もので、さう君のやうにピン／＼と片ツ端から跳ね付けちやア人氣に觸ると、かういふ卑しい事を貴君、それがため近來は當分、舞臺へも出ずに只、をり／＼ちよいと樂屋へ顔を出しますばかりで」

「困ツたもんだな、イツそ今のうち早く女房を持てば宜からう、いよくあれがあの人妻と極れば、可哀さうだが、今まで藻掻いた四方の女共も一時に諦めて仕舞ツて、さう怨まれもすまいよ、そこで腕さへありやア、今度こそ藝に付いて眞實の人

氣だ、兎も角、いつまで獨身で居るから蒼蠅く覘はれるんだ、いくら何でも物の冥利といふ事があるよ、あまり多くの他を迷はすと自然その應報が來て、終焉が善くないよ」

「へエ、考へて見ると、何だか末が案じられますやうで」

「だから一日も早く、思ひ切ツて縁のあり次第に妻帯するさ、もし萬一その氣がありやア、實は此方にも少々、心當りの無い事もないが、どうだね」

壁を隔て、隣屋に耳を敬てし朝鮮髻、おもはず吹き出さんとせし口に手を當てながら骨ばかりの肩を動かしぬ、

「色狂者が、そろ／＼本性を現はして來るぜ」
熊公も聲を潜めながらの苦笑ひ、

「トンでもねエ奴だが、大將も随分また人が悪いよ」

食が進んで胸が開いて召上るものに自然の味が出る、ひりりと馨しい七味唐辛子といへど、實は此奴いかなる浮世の混合物あるやら知れぬ喜助、朝のうちに市中を賣り歩いて、歸れば貧乏馴れた額越に底光りの眼を剥き出しながら、表障子の破れ穴より用もない外を差覗いて、じろく長屋中に何か事あれと窺ふ體、されど一蓮托生の貧乏長屋、いづれも同じ食ふや食はずの奴等、うかく交際へば商賣物の一袋も却つて爲てやらるゝ程の中に、たゞあの大浦卓三のみ取付いて損のない様子ながら、南無三寶、それとも知らぬ最初に隣屋のお虎婆アと口を揃へて毒吐きし事あれば、流石に今更ら近處合壁の手前、這ひ寄つて脚下にも吸ひ付かれず、さりとして立寄れば酒も飲ませ飯にも連れて出る相手を、みすく此まゝ見遁すは残念至極と、人知れぬ腕を組んで首

を捻つた一思案、

いひ合はさねど同じ後悔のお虎婆ア、加之も近來は長屋中の除外物にせられて、いかな業突張も突いて出る手應のない折柄、現在の眼前に大鳥の巢を控へながら、たゞその羽翼の音のみ聞かされつゝ、實は口惜しいやら羨ましいやら、そつと壁越に隣屋の喜助が脈を取りぬ、

「喜助さん、どうして居なさるよ」

「別段、これといふ變つた藝もなく、この通り膝小僧を抱いたまゝ無事息災に、ほんやりして居ますよ」

「そりやア汝さんにも似合はず、あまり藝が無さ過ぎるぢやアないか向側を見なさい、此頃は何だか妙に、ざわくと景氣づいてるやうだぜ」

「さ、それに就いてだよ、最初の見當と違つて、あの肥つてふ案外、懷中工合も瘦せ

こけて居ないらしい模様だ」

「喜助さん、しまつたね」

「ちよつと遣り損つたよ」

「かうと知りやア、他より先に油をかけてやつたにさ、惜しい事をした、うまく出直して何とかなるまいかな」

「さうだね悪く言つたもんの、本人に向つて毒吐いたンぢやアないから、よし告げる奴があるにして、何とか誤魔化せさうなもんだよ、このまゝ意地を張り通したつて一文にもならないからな」

「眞實だ、無い奴を譽めて有る奴と喧嘩でもすりやア間違つてるが、最初に無いと見たから譽めなかつたので、それが案外、あると見て喰ひ付くなア世間一般、人間の正當だよ、また無くなりやア唾も引ツかけてやらない代りに今のうち喜助さん、萬

事殿様待遇で取れるだけ絞り取つてやるさ、外の奴等ア旦那待遇だからね、その中へ此方は一番、ぐつと大安賣の卸値で殿様にして見なさい、肥つてふ奴、きつと調子に乗り出すよ、しかし喜助さん念を押して置くが、まさか一人占にはすまいね」

「そりやア大丈夫、安心するが宜い、苦勞人の喜助だ、敵の咽喉笛に喰ひ付いても味方に沸湯は飲ませないよ」

味方に沸湯は飲ませずとも、大浦卓三の咽喉笛に此奴が喰ひ付き得るや否や、

大浦卓三、例の如く夕飯に立出でつゝ、今しも吾妻橋を渡らんとせし背後より、そつと小走りに追ひ付きし七味唐辛子の喜助、

「旦那様、どちらへ」

「や、唐辛子屋さんか、ちよいと淺草の方へ行くが、旦那様は困るね」

「だつて外に貴君、我々風情から、何とお呼び申すんです」

「大浦さ、卓三ですよ」

「恐れ入ります、ところで、實は少々、お願ひが御坐いまして、先日から今日こそ、今日こそと存じて居りますが、つひ申し上げ兼ねまして」

「は、お互に同じ長屋住居だ、他から物を頼まれる力は逆も無いよ、しかし何か大浦卓三に出来る相談なら、また聞いて見るが、この途中ぢやア、兎も角も歸つての上にしなさい、まだ汝さんとは打ち解けて話した事がないから幸ひだ、ゆるく今夜」

「いえ勿論、かやうな途中では失禮と存じましたが、長屋では聊か外の者の手前、それも別段さし觸りのない事では御坐いますが、やはり何となく、第一にこの喜助は御承知の通り無口の變物で、あまり長屋中にも親しく致しませんから自然、憎まれ

もの、状態で、妙に目立つかと存じまして」

「いやに遠慮深いところがあるね、ぢやア歩きながらでも宜いが、色でいへば白とか黒とか、手取り早く、あらましの大體だけ聞かう、全體どういふこつてすな、かい抓んで」

「へエ、手取り早くと申しましたところで、さう一言には」

「つまり何だね」

「實は拙者の一身上で御坐います」

「一身上、もし運氣でも見るなら、あの八卦屋が本職だ、門違ひしては不可ないよ、は、は、は」

「御戲談を」

「いや眞實だよ、また身でも立てる事に付いての相談なら、其方よりも此方が御相談

を願ひたい最中だ、いづれ聞いても居なさるだらう、風雅でも洒落でもなく京橋の中央から眞ッ倒様に落ち込んで来た人間だからね、どんな最眞目に見てくても當分まづ他に相談しかけられたり物事を願はれたり頼まれたりする奴でない、但し商賣に損をする事と酒でも飲ンで馬鹿談話する事だけは、なかく巧いよ、どこの誰にでも負けない覺悟だ、は、は、は、

突いても引いても案外これは動かぬ相手、加之も夕飯への途中を覗うて来たに、あの朝鮮髻さへ連れて行く奴が、この我へ何ともいはぬ體、さては最初の一の矢を射損ぜしためと思へど、折角の二の矢を捨て、此まゝには置かぬ喜助、

「さ、そこで御坐いますよ、海と川との相違は御坐いますが、實は旦那様、拙者も借金のため妻子を置去に致しまして、あの長屋へ暫時、身を隠して居りますもので」
 きくや否、大浦卓三、じろりと始めて喜助の面體を睨みぬ、

「借金は面白いが妻子の置去は酷いね、自分は兎も角、妻子だけは立つやうにして置くもんだ、それぢやア情がない、第一また隠れて忍ぶ身に唐辛子を賣り歩くとは變だ、しかし汝さんのやうな嘘吐は乃公が好きだ、幸ひ夕飯を喰ひに行くから來なさい、嘘の吐き競争をして見よう、大浦卓三なかく人を欺す事も巧いよ」

流石の喜助、あツと呆れて其まゝの立往生を、大浦卓三、見返りもせず悠々と歩み出しぬ、

七味唐辛子の喜助、ひりツと大辛に喰はせし筈ながら、ぺろりと案外の大甘に舐められて、そのまゝ自己が堪へ走せ歸るや否、おもはず舌鼓を打ち鳴らせば、待ち受けし鄰屋のお虎婆ア、年にも似合はず慾には猶更、耳の近い壁越の小聲、

「喜助さん、大變に早いぢやアないか、どうだったたい、うまく遣ったかね」

「無効だよ」

「無効、なぜ無効だよ」

「何故ツて、あの肥ツてふ奴、芋の煮えたも御存じない大様な面アしてるが、なか／＼豆腐の煮加減まで承知してる奴だ、とても浅い藝ぢやアかゝらないよ」

「は、ア、いよく／＼最初の毒吐いた事を、誰か饒舌ツた奴があるんだな、ぺこ／＼と薄ツぺらな胡麻すり野郎あの朝鮮髻だよ、畜生、しかし喜助さん、まさか惘然と凹垂れて歸ツたんぢやアあるまいね、どツか出直して喰ひ付く急所だけは目ツけて來たらう」

「ところが、どこに急所があるか、さツぱり分らない奴でね、うぬが勝手な事を吐すだけ吐して後も見返らず、さツさと歩の向く方へ往ツて仕舞やアがツたよ、あの様子ぢやア残念ながら當分まづ近寄れないぜ」

「何だね、意氣地のない、わざ／＼途中まで追ツかけて出てさ、夕飯の一寸腹も肥さずに其まゝの逆戻りたア、喜助さん、器量が下り過ぎるぜ」

「なアに随分、際どく切り込んでは見たんだがね、どうも手應のない奴だよ、頭から人を馬鹿にしやアがツてね、しかし喧嘩にもならず、をかしく出りやアあの圖體だ、糞いまく／＼しくツて堪らない」

「それも長屋中が一行に、さうなら堪忍も出来るが、みす／＼他の奴等には飯も酒も惜し氣なく振舞ツてさ、汝さんと妾だけを別物のやうにしやアがるのが癪だ、いッそ何とか腹癒せの工夫は無いもんだらうかね」

「おい／＼婆さん、歸ツて來やアがツたよ、そら今、あの千三屋と鄰屋の西川を相手に何か大きな聲でさ、や、馬の脚も朝鮮髻も負けず劣らず、お世辭を並べて居やアがるぜ」

はや夕飯を済まして歸り來りし大浦卓三、長屋の入口より左右へ面白半分の愛敬を振り蒔きながら、喜助の戸口に歩を停めて、そろりと差覗きぬ、

「唐辛子屋さん、先刻は失禮しました、は、は、は、小兒のやうだが、あの時は腹が空いて夕飯が待ち遠くつて、つい急いでね、只その方ばかりに氣を取られて居ったからね、何を言ったか自分でも分らなかつたが、箸を取りながら段々よく考へて見ると、どうも濟まない事を言つたらしいよ、は、は、は、しかし如何ですな、別段、あらためて仲直りするほどのこつてもないが、お互に打ち解けて面白く話さうぢやありませんか」

こゝが七味の外に浮世の混合物ある唐辛子賣、これ僥倖と向き直るや否、痛くない疵でもすれば膏藥代の出る奴と、そろく本性を現はしかけぬ、

「酒に酔つて何を言つたか分らない奴はあるが、夕飯の腹が空いて自分の饒舌つた事

を忘れる奴があるかい、加之も箸を取りながら段々よく考へたとア、どこまで人を馬鹿にしやアがるんだ、え、おい、外の奴等と違つて鑑一文お世話になつた覚えはねエぞ、さア承知の蟲が消えて仕舞つたア、どうしてくれるんだい」

お虎婆、壁際に口を當てゝの小聲、

「うまいね、そこだよ、しつかり頼むよ」

順で叶はねば逆に食ひ付く奴、例の女物を仕立て直せし素裕に貧乏馴れた額越の目を光らしつゝ、七味唐辛子に呼び馴れたる聲を張り上げて叫び出しぬ、

「さア承知が出来ないんだ、うぬも此方も同じ家賃を拂つて恩も義理もねエ一蓮托生だ、なぜ人を馬鹿にしやアがった、ついでに長屋中へ謝つて置くが、この大浦といふ野郎に一ツ垂滴の酒でも一ツ粒の飯でも妙な工合になつた奴ア、仲裁に出られねエぞ」

こいつ面倒と我罫へ入りし大浦卓三、かくと聞くや否、靜にランプ代用の西洋蠟燭を立て、表障子を引開けながらの高笑ひ、

「は、唐辛子屋さん、そこで喚くよりやア、こゝへ來なさい、なか／＼面白い人だ、談話といふものは近くツても離れて居ては興が無いよ」

「な、何だと、べらぼうめ、談話ぢやアねエぞ」

「は、ア喧嘩かね、もし喧嘩なら猶更ら近寄ツて來るが宜い、いくら怒ツても其處では手が届くまい」

「や、この肥ツてふ、いよく人を馬鹿にしやアがるな」

「同じ事で、この豚野郎と言つた方が手厳しく聞えるね、いかにも二十貫と六百目だ、瘦せては居ないよ、また馬鹿にしやアがるとの御不足だが、實は失禮ながら、あまり伶俐とも思ツて居ないさ、しかし此方も其相手といへば、なるほど、やはり伶俐

でないね、は、は、は」

「よし、さう吐しやア、今そこへ出かけて遣らア」

小指の端を擦り剥いても、膏藥代で半月か一月は寝て食ふ覺悟、わざと袖を巻き上げ裾をからけて、威喝の出刃庖丁も無ければ、持ち合せの古手拭を驚掴みのまゝ、ぬツと飛び出す眼前に朝鮮髻、

「この八卦屋め、何をしに來やアがツたシだい、すツ込んでろ、平生の七味屋たア違ツてるぞ」

生憎く熊公まだ歸らず石作は居らず、西川まで今日に限ツて外出の折柄、朝鮮髻、はツと驚いて物も得言はず遁け出せば、以心傳心の鄰屋より待ち受けしお虎婆アが飛び出して俄に抱き止めぬ、

「まア喜助さん、宜いちやアないかね」

「なアに、かういふ野郎を此まゝ黙ッて居ちやア圖に乗ッて何を吐すか知れねエから
乃公が一番、やツつけて遣るんだ、畜生、ふざけ過ぎるよ」

「だッてさ、まア宜いッてば」

「唐辛子は賣り歩いて先方から賣り出された喧嘩ア随分、買ッて見る氣だ、老年の
くせに危険いよ、放した」

「いや放さない、いくら年は取ッても抱き止めた以上は、放さないよ」

「なぜ放さねエんだ」

「何故でも放さない、この長屋で草分のお虎婆だ」

大浦卓三、満面の微笑を浮べながら、のそりと起ッて、ます／＼洋蠟の手燭を差出し
ぬ、

「婆さん、本人の希望だから放してやる方が宜からう」

ゆツたりと春の小山に似たる大浦卓三の前に、がさ／＼と枯木の枝を組み立てしが如
きお虎婆ア、

「あゝいふ人間と彼是なすツちやア、つまりませンよ、高が七味唐辛子を賣り歩いて、
やツと其日を送る男ですもの、お勝ち遊ばしたところで何にもならず、瘦せても下
司は手が早う御坐いますからね、もし萬一の事があれば旦那、それこそ大變だと考
へまして、兎も角も妾が抱き止めたまゝ無理に押し込んでは置きましたが、やはり
後が蒼蠅う御坐いますよ、つまり旦那と取組めば勝たなくッても先方の手柄で、旦那
那の方は御人體負をして在らッしやるんだから」

「はゝゝゝ人體負、そりやア外に家を持つて身分ある人のこツたらう、彼奴のいふ通
り同じ長屋で同じ九尺一間の家賃を拂ッてる以上、勝ッた方が勝ッて負けた方が負

ける同じ人間だよ、別段また用もなく毎日、ぶらく／＼かうしてるんだから、いつでも閑暇で相手になるとすりやア後の蒼蠅い理由も無からう、しかし老婆に厄介かけて濟まないね」

「あら旦那、御戯談を、何が同じ人間なもんですか、誰が貴君と彼奴を同じやうに見ますもんかね、きつと後が蒼蠅う御坐いますよ」

「ぢやア蒼蠅いとして、どうなるんだ」

「どうなるツて、どうもなりは致しません、御人體の上から申せば、どうかして、おやり遊ばした方が宜しいかと考へますよ、折角かうして妾も、中間へ這入ったもんで御坐いますからね」

「は、ア、どうかしてやれとは全體どうしてやるんだね」

「早く申せば、幾何かね旦那、犬にでも喰ひ付かれたと思召して相手が旦那、あれで

すもの、いづれ御損で御坐いますよ旦那、時の災難でさ」

「む、金でも遣れといふのかね、は、そりやア随分、遣っても宜いが、彼奴には一文も遣れない、しかし婆さん、汝さんなら幾何か出す氣にもなるよ」

「おや、旦那、まア、濟みません事、だから御人體が違つてると申すんですよ、いえ何、旦那、彼奴は妾が如何とも致しますからね、實は旦那、妾も今年が六十六で御坐います、若い時分は、ちよいと乙に暮した事もあつたんですが段々と不幸でね貴君、麻布に一人の娘が御坐いますばかりさ、それが旦那、産んだ子よりも貰ひ娘でせう、すれば猶更ら大切にしてくれないぢやアならない筈ですが、この阿魔め、とんだ料簡の悪い女で、汝は好いた野郎と相應に世帯を持つて居ながら、わづか月に一圓五十錢づつ、それも此方から出かけて往つて、やう／＼喧嘩腰に取つて來るといふ、なさけない始末でね、この老年になつて何故、まアかう苦勞するかと残念で

堪りませんが、性質、氣が弱くツて馬鹿正直で御坐いますから、つい涙脆く、せめて後世でも宜からうと諦めて、堪忍いたしますのさ、おや旦那、三圓、御辭退なしに戴きますよ、此後また何か御用でも御坐います節は、どうか御遠慮なさらないで、年は取つても今時の若いもんには旦那、まだくさう踏み潰されて堪るもんですか、相手さへありやア妾にでも出る氣で御坐いますよ、は、は、は、」

流石の大浦卓三、あつと呆れて無言のまゝ、暫時お虎婆の顔を見詰めぬ、

一碗の冷飯を争ふ餓鬼道の諺、互に骨肉よりも深き味方となるは慾の皮の張り合ふ瞬間、こゝに三圓といふ金を見れば、忽ち血眼を据ゑて不倶載天の仇よりも怖ろしき敵となりぬ、

されど今日いづこも同じ敵味方の離合集散、たゞ大小輕重あるばかりの事、お虎婆ア

と喜助の世の中なり、

「御苦勞だツたな婆さん、不意に背後から抱き止めてくれた工合は巧かつたよ、しかし幾何になツたね」

「たツた一圓さ、少くとも五圓を占めてやらうと思つて随分、骨を折ツて見たがね、なか／＼あの肥ツてふ奴、なるほど汝さんのいふ通りだ、とても淺い藝ぢやア、おツツく野郎でないよ」

「おい／＼婆さん、ふざけちやア困る、實ア忍んで、そツと立聞したぜ、三圓だらう」

「おや、油斷がならない、聞いて居たのかい、人が悪いね」

「どツちが悪いんだか、兎も角も三圓、出して貰はう」

「誰にさ」

「まア文句いはずに出すが宜いぢやアないかね、その上で一割にするよ」

「ぢやアお待ち、一枚だけ、ちよいと換へて来るから」

「なアに大丈夫、さう先取に換へなくツても間違ひは無ないよ」

「だツて汝おまへさんに出だす一割わりの三十銭せんが今いまこゝに無ないからさ」

「は、は、その一割わりは此方こつちから其方そつちへ出だすンだよ」

「あれ、戯談じやうたんかと思おもやア本氣ほんきになツて、とんだ事を言いひ出だすよ喜助きすけさん、この三圓さんは妾わたしが貰もらツたンだぜ、立聞きたちぎしたといへば猶更幸なほさらさいはひだ、彼奴あいつには鏹びた一文もんも遣やれないが婆はあさん汝おまへさんには出だすと、わざ／＼本人ほんじんから念ねんを押おされて受取うけとツた三圓さんだよ、そのうち一割わりでも無理むりに殺そいで渡わたすなアよく／＼妾わたしが好人物おひとよしに生うまれたからさ、三十銭せんが嫌いやなら渡わたさないだけのことことツた、不足ふそくがありや出直でなほして本人ほんじんに談判だんぱんするが順當じゆんたうだ、いつでも閑暇ひまだから相手あひてになると言いツたよ、馬鹿ばか々々くしい考かんがへて見みなさい、一旦たんかうして自分じぶんの物ものになツた金かねを誰たれが分わけてやりたいもんかね、恍とほけ方も酷ひどいよ喜助きすけさん」

「な、何なんだと、この業突張ごふつくはりめ、年齢としに免めんじて聞き直なほすンだぞ、も一度ひと、いへるなら言いツて見みろ」

「人ひとが變かはらないから幾度いくど、言いツても同じ口おなで同じ事ことだよ、妾わたしが貰もらツたから妾わたしの三圓さんさ、一割わりが嫌いやなら出ださないのさ、出だすもんか」

「やい／＼やい、その三圓さんは全體ぜんたい、どうして生うまれた三圓さんだ、うぬが口端くちさきで取とれるなら何故なぜ、今いままで取とらねエンだ、この乃公おれが出るやうにして出だした金かねだぞ、うぬア取次とりつぎで受取うけとツただけのことことツた、さア二割わりにしてやるから」

「慾よくの深ふかい、一割わりさへ引ひツ込こめたにさ、また二割わりにしるといふンかね」

「ぐ／＼面倒めんどうだから、うぬに二割わりくれてやるンだい」

「どの二割わりを貰もらへるの、この三圓さんは別物べつものだよ」

「おい、婆はあさん、お虎婆とらばあア

「何だね」

「悪い事は言はねエ、おとなしく出した方が兩爲だ、一度や二度は老年に免じてもね、仕舞にやア癩癩の蟲といふ奴が承知しないから、六十六の婆を相手にしないとも限らないよ」

「さう心配せずと相手にして御覽よ、六十六の婆だから少々ばかり肉は落ちてても骨は残ッてるよ」

お虎婆アと七味唐辛子の喜助と、雙方より聲を潜めながら頻りに争ふ體を、そのまゝ聞捨にして差覗きもせず、ぶらりと堀を立出でし大浦卓三、かくと見るや否、長屋の出口に待ち受けし朝鮮髯、

「どちらへ、只今は、とんだ御迷惑で御坐いました、いえ實は驚いて、すぐ飛び出し

た事は飛び出しましたもの儲あの七味屋といひ、お虎婆アといひ、あゝいふ奴は外から人が這入ると却って事の大きくなる蒼蠅い奴で、それがため、わざと差控へて居りましたが」

「はゝゝゝなアに小さくツても大きくツても、あれだけの人間だよ」

「ところが彼奴等、どうした理由か頻りに争ッてる様子で御坐いますな」

「同じ穴の狸め、投げ與へた餌食の取合で争ッてるんだよ、あはれなもんだね、今に齧合を始めるよ、しかし、もう聞いて居ても見て居ても嫌な氣がして面白くないから、浅草邊まで散歩に出かけるのさ、時に今夜ア神易の御休業かね」

「休業では御坐いませんが、生憎と熊も西川も石作も長屋中、ふしぎに揃ッて誰も居りませんから、どうなるかと猶更ら心配いたしましたして」

「そりやア氣の毒だった、ぢやア今夜の分を引受けよう、平均に毎晩、何人ぐらゐるづ

つの客があるね」

「恐れ入ります、さやうな事を、いえ決して、恐れ入ります」

「さうでないよ、かりにも他の家業を妨けたんだからね、不足だらうが兎も角お馴染

甲斐だ、一圓に負けて貰はう、明日の朝あけるよ」

そのまゝ、飄然と立出でし宵闇の後姿、見えねど朝鮮髯おもはず伏拜んで、雀躍しながら

我場へ飛び込めば、をりしも石作が歸りし體に此奴また飛び出しぬ、

「石作さん今かね、宵の内に大變な面白い騒動があつたぜ」

「何だよ唐突に」

「委しい事は後で話すがね、ちよいと耳を立て、そら、聞えるだらう、お虎婆アと

七味屋の喧嘩だ、いかにも取組が善いぢやアないか」

「なるほど、こいつア妙だ、大分に激しい様子だな、しかし八卦屋さん、うツかり彼

奴等の仲裁に這入れないよ」

「狂犬の嚙合を別けたツて、誰が彼奴等の仲間へ飛び込むもンかね」

忽ち聞ゆる俄の大聲、どたばたと立騒ぐ物音、ぎやツと蛙の踏み潰されしが如き聲、

つゞいて長屋の外へ飛び出せし登音、そのまゝ、暫し寂然とせし中より熊公の女房が叫

ぶ金切聲、

「お虎婆さんが殺されたよウ、七味屋が遁け出したア」

聞くや否、朝鮮髯と石作の兩人、おもはず互に抱き付いて腰うち抜かしぬ、

熊公夫婦が其夜の物語

「全體、どうしたんだい」

「どうしたツて良人さん、今でこそ阿しいやうだが、一時は大變な大騒動だツたよ、

つまり宵の口に七味屋め、何だか急に怒り出してね、鄰屋の旦那へ喰って掛ったと



ころを、お虎婆アが背後から抱止めたは宜いさ、しかし、それが狂言らしいんだよ、すると案の定、あの業突張が鄰屋へ入り込んでね、まさしくと聞いて居れないやう

な馬鹿々々しい追従輕薄を蒼蠅く並べ出したから、流石の旦那も閉口なすつたと見えて、幾何か呉れたのさ」

「太エ婆アだな、もし乃公が居りやア畜生、掴み出してやツたにさ、残念な事をしたよ」

「ところが良人さん、其お金でね、今度は味方同士の婆と七味屋の大喧嘩」

「最初は口ばかりで、互に負けず劣らず毒の吐きツ競をして居た奴がね、いよく治まらないと見えて、どたばたと急に激しい取ツ組合の物音が聞え出したよ、なアに普通の人間なら妾だつて近處の義理で飛び込むがね、あゝいふ奴は後が面倒だと思ツてる最中に、ぎやツといふ妙な聲がしたから、おもはず驚いて出ようとする鼻頭を七味屋の遁け出した工合、どうも尋常事でないのさ、おまけに追ツかけて出る筈

の婆が良人さん、ひツそりとして音がなからね、そツと覗いて見ると大變、白髪を振り亂して目を剥き出して二三本の齒を噛み出したまんま横ッ倒しに斃れてるんだもの」

「どツか急所でも、ぶたれたんだな、そのくれエな事アあツて善い婆だ、それで今の通り、うん／＼と唸ッて寝込んでるんだな」

「今だから急所を打たれて、一時、氣絶したもんと分るが、その時は良人さん、全く死んだと思つたからね」

「しかし長屋中、外に誰か居さうなもんぢやアねエか」

「ところが旦那は蒼蠅いと思つたか、出て仕舞つたし、まだ良人さんは歸らず西川さんも不在、あの馬の脚まで何處へ跳ね出して居ないのさ、たゞ石作と八卦よい屋は無事に居たんだがね、おもはず出した人殺しといふ妾の聲に驚いて、抱き合つたま

ま二人とも腰が抜けたんだよ、ぶる／＼震へて物も言へないんだもの、そのくせ良人さん、お虎婆アの氣が付いたと聞くや否、ひよ／＼また動き出してね」

「は、／＼目に見るやうだ、道理で今、乃公が歸つて來ると二人ながら妙な面アしてこそ／＼這入ッて仕舞つたよ、もし腰でも抜かさなきやア第一番に飛び出して騒ぐ奴だに、は、／＼しかし七味屋ア眞實、遁けたんだな、いくら因業な婆でも六十六だから、しまつたと思つて遁け出したんだな」

「さうだよ、きツと打撲所が悪くツて、死んだもんと思つたんだらうよ」

「彼奴等ア自業自得で、どうなつても宜いが、兎も角この長屋から死人を出さねエで幸福だ、さアこれで空屋が一軒また出來たよ、せめて今度ア人間らしい人間に住み込んで貰ひてエもんだな」

いつまで生きて居たくもないが、さて殺人犯もないと、へらず口を叩きしお虎婆、いよく平生の希望通り人殺しに逢ふべきところを、やうく一時の氣絶に取止めながら、例の三圓を奪はれしのみか、ことし六十六の胸板を七味屋の脚に蹴飛ばされて、今朝まだ起きも得やらず、薄き煎餅蒲團たゞ一枚の上に身を横へつゝ、風の遠音に等しく幽に唸りぬ、

をりしも表障子を引開けて、ぬツと差覗きは熊公、

「どうだい婆さん、前夜ア酷い目に出喰はしたさうだね」

「おや熊さん、定めて聞いたらうが、とんだ災難に逢ったよ」

「まさか不意に出来た災難でもあるめエが、兎も角も唸ッてる工合ぢやア、どツか悪い急所を打たれたんだな、少しやア痛むかい」

「少しどころかね熊さん、痛まなくツてさ、氣絶したくらゐだもの、瘦せても相手は

野郎だよ、この胸の中央を畜生、口惜しくツてならない、もし萬一これが病源で此まゝ死んだら、あの喜助め、どこに居たツて満足に置く奴ぢやアない、きツと取殺してやる決心だ」

「おい〜婆さん、それが悪いんだ、もう汝、六十六だぜ、七十に四年だ、さう因業に執念深く人を恨むもンぢやアねエよ、考へて見るが宜い、七味唐辛子だツて、ただ汝の胸板を蹴飛ばした理由でも無からうさ、野郎が、よくないにしろ汝の方にも婆さん、また蹴られるだけの事があるんだらう、いくら痛くツても汝は一時の氣絶で生命ア無事だ、しかし野郎は眞實、死んだもンと思ツて遁け出したんだから、今頃ア青くなツて、びく〜してよ、いはゞ五分五分だ」

「そりやア熊さん、腑に落ちないよ、喧嘩ア五分五分でも、此方に現在、みす〜取られたものがあるんだからね」

「は、は、は、まだ汝、そんな業突張を放れねエンだな、困ったもんだよ、もし乃公の阿母でもありやア、この四十面さけて男泣きに泣くぜ、しかし有難く思ふが宜い、どうせ、さうだらうと言つてね、おい婆さん、向ふの旦那から三圓また下さるんだ、乃公が頼まれて汝に渡す以上、少しやア遠慮して唸り聲でも引ッ込めて貰ひてエ」
 「だつて熊さん、こりやア苦しいから自然に出るんだよ、わざく、何も唸りたかアないさ、時に三圓、有難いね、そりやア喜助の野郎に取られた三圓を下さるんだらうか」

「いちく、癢に觸るな、たゞ有難く黙ッて頂戴しろい」
 「ぢやア熊さん、その三圓は喜助に取られた分として、もう二三圓、かうなつた手當に貰ッて欲しいもんだね、大きな聲では言はれないが、そつと一割ぐらゐる酒料を出すよ」

熊公、今にも渡さんとせし三圓を其まゝ手に持つて、おもはず大浦卓三の許へ振り返りざま飛び込みぬ、

「旦那、お止しなせエ、あんな業突張に遣らなくつても、まだ世の中に人間の腐つた奴ア居ますよ」

わざく、あの業突張に遣らずとも、まだ世の中に遣るべき人間の腐つた奴はある筈と、そのまゝ三圓を大浦卓三の手に返して自己が塙へ立歸りたる熊公、されど流石に呆れて驚いて思はず腕を組み始めぬ、

「あの婆ア、とても凡人ぢアねエよ」
 をりしもお虎婆が頻りに唸る聲、ますく高く、いよく激しく、果は今にも死するかと思ふばかりの苦し氣なる皺枯聲を張り上げて、さも恨めし氣に叫び出しぬ、

「あゝ苦しい、胸が張り裂けるやうだ、残念だ、あゝ切ない、前夜の三圓は喜助の野郎に取られて、また今朝の三圓は熊さんにとられた、何故かう人に金を奪られるんだらう、あゝ残念だ、あゝ苦しい、死んでも忘れない」

大浦卓三は何とやら一種の鬼氣に迫らるゝ心地、果ては堪へ兼ねて壁越に私語きぬ、「どうだね、あの聲は、いくら平氣でもさ、あゝ絶えず續けられちやア聞いて居られないよ、馬鹿々々しいこつたが、どうか遣つて貰ひたいね、もう二三圓は出して貰ひよ」

熊公も面を皺めながら、そつと壁際の小声に私語きぬ、

「旦那、どうしませう、實はね、あの婆ア、ふざけた真似をしやアがると思ひながら、やはり何だか妙に變な氣持がして堪りませんよ、あれ、あれですもの、わざと段々聲を大きくして、いかにも苦しさうに恨めしさうに唸り出しますぜ旦那、まだ白晝

だから堪忍も出来ませんがね、あゝいふ嫌な物凄い聲を寢靜まつた夜の夜半に耳の底へ傳へられちやア叶ひませんよ」

「だから今のうち、幾何か増して遣るのさ、しかし因業も慾の皮も、あれまで恥知らずに思ひ切つて來ると、なか／＼偉いもんだな、眞實、閉口だよ」

「全體、あの婆ア、何の生れ變りでせうね、おや、喜助ちやアねエ、今度は旦那、わつしを取殺すと吐しますぜ」

「はゝゝ、兎も角も此方は人間の耳があるから、かうなりやア負けるよ、さア早く遣つて貰ひたい」

「幾何、お遣りなさいます」

「五圓も遣らうか」

「勿體ねエが、ぢやアその五圓を、そつと枕頭へ抛け込んで遣りませうよ」

熊公、大浦卓三より受取りし五圓紙幣一枚を携へて、表障子の破れ目より聲もかけずに立寄りつゝ、そつと抛け込めば、今の今まで叫びし悪口雑言は儲置き、これのみはと思ひし苦しけの唸り聲さへ俄に消えて、ぱたりと止みぬ、

流石の大浦卓三も熊公も、お虎婆アには呆れて驚いて二の句も次けず、みすくしてやらるゝとは知りながら、五圓紙幣一枚そつと表障子の破れ目より抛け込めば、今にも死ぬかと思はれし唸り聲、ぱたりと止んで皺ッ面に微笑を浮べつゝ、ひよこく何處へか立出でし體に、もはや首を捻つて感心するの外なし、

「どうです旦那、あれでも不思議に人間の種をうけて生れた奴なんぞでせうか、随分なれまで長屋中に持て餘された業突張ですがね、なアに乾ツからびた梅干婆と高を括つて、この熊ばかりやア少しも驚かねえんですよ、しかし今日といふ今日こそ、い

よいよ始めて驚きましたね、しみぐ何だか妙に怖くなりましたよ、わけて旦那のやうに取られる物のある方ア以後一切、うかく相手になれませんぜ、あの様子ぢやア可哀さうに七味唐辛子も一杯、喰つたらしい鹽梅だ、考へて見ると一旦、うぬの懐中へ入れた金を死んだつて殺されたつて放す婆でねエ奴が、たゞ氣絶したばかりで、どうも變だ、事に依ると旦那、最初の三兩と今の五兩と都合八圓、あの婆に遣られましたぜ、七味屋め彼奴も何か業をしさうな野郎だったか、とんだ剛敵に出喰はして空手のまんま加之も青くなつて遁け出しやアがツたよ、はゝゝゝ」

「なるほど、さうかも知れないね、しかし偉い婆アだよ、いくら恥辱も外聞も構はないにしろ儲あゝ思ひ切つた藝は出来ないもんだよ、強慾も因業も人間あれまで劫を経て來ると確に一つの藝だ、現在まだ今の唸り聲が耳の底に残つてる我々の眼前を、ひよこく平氣に濟まし込で、どツかへ出て往つた工合、いやはや黙つて拜むよ

り仕方が無いね、は、は、は、あの七味屋なんかア世間普通、慾にも悪いにも際限のあ
る奴だから、迎も及ぶ筈がないさ」

「眞實ですよ旦那、あ、いふ婆は百まで生きて居たッて現世で業の曝しきれねエ奴で
すから、うぬが定命に息を引取ッても、その死際ア定めて怖ろしからうと思ひます
よ、きツと四邊近處の誰かへ怨恨を残しますぜ」

「は、は、は、酷く急に怖れ出したね」

「今までと違ッて、何だか妙に怖氣が付き出しましたよ、どうせ旦那ア長く在ラッし
やる筈はねエが、この熊なんかア生涯こゝを動く事の出来ねエ人間ですから、いづ
れ旦那、あの婆の死際に出喰はしますよ」

「は、は、は、そんな事は儲置いて、生涯こゝに居ない方が宜からう」

「だッて、居ずにやア居られませんよ」

「いや、そのうち何とかなるだらう、この大浦卓三の出る時には、どうかしよう、實
は過日から思ッてるんだ、辻傳を曳かして置くには惜しく出来てるよ」
をりしも戸外に窺ふ朝鮮髯、

「何卒その砌は拙者も、熊さん宜しく取持を頼むよ」

「おや、いつの間に汝、腰が立ッて歩けるんだ」

「これさ熊さん、お互は兎も角、旦那の前だけは戯談を止して貰ひたい」

「は、は、は、何が戯談なもんか、あツと最初に變な一聲を出したま、あの石作と抱き
合ッて腰は抜ける物は言へず、ぶるく震へて居たといふぢやアねエか」

「なアに、ちよいと其場の工合で、まさか嚙り付かれた石作を振り放す事も出来なか
ツたからね、は、は、は」

大浦卓三、いづこよりか一卦の書状を添へて自用車に迎へられつゝ、朝の九時ごろ俄に立出でしが、生憎その後へ來りしは例の妻女と妹の高島田、萬綠叢中の紅一點といふ諺あれど、これは正しく眞ッ黒なる煤の中へ落ち散りし薄紅と眞紅の名花二輪、加之も朝日に射す影と小袖の匂ひ、ちらと破れ障子の穴より差覗くや否、等しく一時に飛んで出でしは朝鮮髻と花野露雄、おもはず互に顔を睨み合うて、意氣地に募る鞘當よりも慾と色との肱當なり、

「何だね花野さん、拙者が居るよ、すッ込んでる方が身のためだ、わざ／＼また恥を搔きに出なくツても宜からう」

「お氣の毒だが八卦屋さん、其方こそ出幕が違ツてるよ、實は過日あらまし太夫元と内談の出來た僕だ、どんな藝をするか黙ツて見物するが宜いさ」

「おや、この馬の脚め、蹴躓いて折れない用心しろ」

「何、この筮竹亡者め、そんな下手ツ糞の卦で他の事が分るもんかい」

向側の西川と石作が壁越の笑ひ聲、

「また始まつたぜ石作さん」

「困ツたもんだね」

「今日こそ叩き合ツても掴み合ツても、うッちやツて置かうぢやありませんか、癖になツて蒼蠅いよ」

「さうだよ、どツちか怪我をする方が宜いね、まアそれまで差控へるさ」

きくや否、實は叶はぬ朝鮮髻、はツと俄に自己が塹へ飛び込んで今は力と頼むもの壁一重に熊公が鼻の外なし。

「細君、今そこへ隣屋の色狂者め、のこ／＼出かけるかも知れないからね、大將の御不在中、御兩女へ間違のないやう氣を付けて下さい、熊さんが居らないで心配だ、つ

いでに拙者より宜しくとね、早速、御挨拶に行く筈だが少々、出られないんだよ」
熊公の女房、あまりの馬鹿々々しさに返事もせず、たゞ二女に對うて身を縮めながら
の笑顔、いつも自然の世話に出来たり、

「いえ先刻、つひ一時間ほど前で御坐いませう、何處からか急の御迎ひで、其お俵に
召して往らッしやいましたが、暫時お待ち遊ばせば」

「さうですか、では暫時ね、しかし毎々さぞ御厄介で御坐いませう、何分、我まゝな
良人ですから」

「とんだ事を、手前こそ、いろく御親切を蒙ッて居りますよ、只今も壁越で何か妙
な事を申しました、あれは淺草へ出る八卦屋なんですが、あゝいふ貴女、くだらな
い惚けた人間にまで優しく仰しやる旦那様ですから、つい宜い事にして長屋中の者
が、ほゝゝゝだが身分の違ッた、こんなところは却ッて旦那様の方でも、面白をか

しくツて、お慰みになるんで御坐いませう、ほゝゝゝ」

「あら、まア、ひどい事を」

「いゝえ貴女、眞實で御坐いますよ、どうせ正當の世間には身を容れる穴のない連中
ですもの、一人として満足に出来たものは居りませんさ、ほゝゝゝ」

をりしも半ば開きし表障子の外より尻目づかひに花野露雄、空屋の瘦鼠こゝに蒲焼の
香を嗅ぎ付けしが如く、ちよろくと姿を現はせば、熊公の女房、おもはず吹き出し
ぬ、

「御覽遊ばせ、あゝいふ不思議な生物も住んで居りますよ」
きくや否、得たりと朝鮮髻また自己が髯より饒舌り出しぬ、

「細君、危険だよ、何とかして早く追ッ拂はないと不可ないよ、萬一お二女に間違が
あッちやア大變だ、現在その通り正氣でないんだがね、たゞ呵しく笑ッて濟まな

い奴だよ」

をりしも向側の業突張お虎婆ア、例の唸り聲に八圓の味を占めし以來、ますく事あれかしの皺面そろりと差出しながら、幸ひ此狂氣を種に一仕事また喰ひ付かんとの野心、わざと聲を潜めて招き入れぬ、

「俳優さん、お這入りよ、あの八卦よい屋め何を吐したって構はないさ、ありやア彼奴の持病だからね」

目と鼻の間に差對ひの上等棧敷、これ有難いと色狂者そのまま、恥づかし氣もなく手を合はして飛び込めば、熊公の女房、はツと驚いて今まで開きし障子を音高く、ばたりと閉め切りぬ、

「いくら白晝でも貴女、山中の一軒屋と同じ事、うツかり油断のならない長屋で御坐いますよ、妙な化物ばかり巢を構へて居りますからね、ほ、ほ、ほ、ほ」

「あら、まア、いくら何でも、は、ほ、ほ、ほ」

「い、え眞實で御坐いますよ、今あの向側から不意に顔を出した皺くちや、あれは貴女、旦那様さへ過日、とんだ事で實は閉口なすつたくらるの因業婆なんですよ、それ今この前を、ちよろしくして居て飛び込んだ奴、あれは色狂者、壁越に蒼蠅く饒舌るのは慾狂者また外に貴女さまと面白いのが居りましてね、朝から晩まで絶えず半商賣のやうに吼えたり噛み合ったり致してるんですもの、何かの因果と諦めて、仕方なしに住めばこそ、もし外に遁け出せる親類の端くれでもあれば一日だツて貴女、辛抱の出来るところでは御坐いませんよ、ほ、ほ、ほ、ほ」

をりしも歸り來りし大浦卓三、それと見て首を出す朝鮮髯、

「や、お歸りですか、先刻から奥様と妹御が入らツしやいました御待受け」

「また二女で遣ッて來たんだな」

「ところが、あの馬の脚め、困ったもんで御坐いますよ、そろくまた例の色情狂を
始め出しましてね」

「は、は、罪のない男だね」

「どうして貴君、なか／＼彼奴あれで罪のある奴、あまり大目に御覽なさると
何を仕出來すか、恥辱を捨てた馬鹿と掘ぬき井戸は底の知れないもんで御坐います
よ」

「なアに底が知れなきやア、上から蓋を、は、は、は」

いつもながら悠々たる態度、懐手のまゝ、自己が塙に入りて、待ち受けし妻と其妹に
對ひつゝ、壁際の大胡坐、

「過日、來た時、さう言つた筈だ、また手紙を出すまで必ず來るなと、しかし今日は
運よく汝達に小言のいへない事があるからね、まア兎も角、怒らずに置かうよ、は

は、は、は」

良人は二十貫目以上の大兵肥滿、妻に色白は細面の小品といへば、聞いて不似合に思
へど、見ては男としての立派さに女としての優しさ、吹いて飛ぶやうなる當世流のハ
イカラに大道白の如き廂髪の搦むよりは、寧ろ却つて一種いふべからざる男女の配合
と夫婦の調和、加之も互に愛の相場と圓滿の時價を賣買せぬだけ猶更自然の美なると
ころありて、姉の影に潛み姉壻の此方に坐せる十八の高鳥田、これぞ時に取つて根じ
めの名花一輪なり、

「どうせ今日は、叱られる覺悟で、まゐりましたの、實は淺草へ參詣いたしましたか
ら、つひ吾妻橋を渡つて、しかし良人どちらへ、お俵で急に、お迎ひが來たさうで
御坐いますね」

「なアに例の一件さ、面倒だから委しい事は、おひく話すがね、兎も角も安心しろ、

いよく、乃公の思つた通りになつて来たよ」

「おや、どういふ工合に」

「つまり斯うだ、債権者一同が反對に立往生の結果、その總代に頼まれてる黒川といふ辯護士がね、今朝、急に俵で迎ひに来たから、往つて見ると果して思つた坪だ、まづ第一に差押は無論あのまゝ、解いて借金は銀行利子に毛の生えた年八分五厘で七箇年の据置き、さらに、運轉資本五萬圓を出して、今一奮發この乃公に働いてくれといふんだ、はゝゝゝどうだい、さのみ悪くも無からう、なかゝ大浦さんは案外上手な呼吸のある方だよ、好い御亭主を持つて汝も幸福だぜ、今後ますます大事にしないよ、はゝゝゝ」

「あら、まア、さうですか、よく観音様へ御參詣いたした事、實は良人の在らつしやる方角ですから、此ごろは一所懸命に御願ひ申してゐるんですよ」

「おいゝ、観音様より今いふ通り、この御亭主を粗末にしちやアいかんぜ、ねエ鶴ちやん、はゝゝゝ」

「そりやア良人、勿體ない事です、観音様は随分、諸方に御坐いますよ、しかし良人は世界中お一人だもの、はゝゝゝだが妾も良人からは一人の筈ですよ、それとも外に二三人、どツか隠れて居やアしませんかね」

「うまい、うまいゝ、こいつア、うまく出来た、はゝゝゝとところで近日、いよくこゝを出なくツちやアならないが、さて何だか、妙に名残り惜しいやうな氣がするね、保養かたぐ、もう一月も居らうか、イツそ汝達を引取つて、おい鶴ちやん、どうだ、この長屋で嫁入しないか、面白いぜ、幸ひ實に結構な婿のなり人が居るぜ、はゝゝゝちよいと見せてやらうか」

「また、姉さん、だから妾、來るのが嫌ですワ」

「なアに平生の戲談だよ、良人も何です、つまらない、妹だつて可哀さうに、いろんな心配して来るんですよ」

「御免下さい、は、は、は」

女心の猶更人知れぬ胸を痛めて、この末いかになり行くかと思ひし一家の破滅を免れしのみか、降るだけの雨も降りて世諺にいふ地の固まりし嬉しさ、三月あまり響めし愁眉と共に大浦商會も再び元の如く開き直すべしとの委細を聞くや否、日本晴の心地に冴え渡る姉妹の風情いと美はしく、隣屋の熊公が女房へは一入の愛敬を残し朝鮮髻にまで會釋の小腰を屈めて、いそぐと長屋を立出でし後姿に、魂魄ぬけ殻の色狂者、お虎婆の塙より首を差出しながら、ほつとして見送りぬ、

「やア花野さん、どうだね」

大浦卓三が不意の聲に、はつと氣を取直すべき筈ながら、あはれや此奴いよく氣が

上せて五體の調子を失ひ、一種異様の微笑を浮べつゝ入り來りぬ、

「只今は、御細君が入らつしやいましたね、今日で二度お見受け申しますが、實に御容色の美しい方で」

「は、は、は、あんな女は美しいも醜いも仕方が無いよ、しかし妹の方は少々、見られるやうに出來てるからね、どツか貰ひ手があれば周旋して下さい、ことし十八だ、いつまで捨て、も置けないさ」

「へエ、全體、どういふ人間が御希望で御坐います」

「なアに男でさへありやア宜いんだ、さう世の中は此方の注文通りに行くもンかね、つまり縁」

「でも職業が身分に」

「職業も身分も入らないよ、その男に遣るんだから」

「なるほど、さうですな、職業にも身分にも寄らない、その男に遣る、時に、如何で御坐いませう、甚だ突然で、失禮かも存じませんが、過日、この拙者に妻帯せよと仰しやいましたね」

「さうく言つたよ、は、は、は、いろんな女の怨恨を受けない今のうち早く妻帯した方が身のためだと勧めたね、ありやア眞實だ、第一そのまゝ一人で居ると危険だよ、どうしても女難に掛りさうだからね、は、は、は、」

「いえ實は此ごろ頻りに、その用心ばかり致して居りますよ、ところで、拙者には、どんな妻が向きませう、もし御心當りでもあれば、ちよいと、お洩らしを願ひたう御坐います」

「さういはれると、さて、その心當り、ないでも無いがね、言ひ出して見て萬一、氣に入らないと困るよ、可哀さうに娘盛りだから、恥辱になるさ」

花野露雄もはや堪らず、我を忘れて膝を進めながら、てかく光りし出額に例の反齒を剥き出しつゝ、加之も一所懸命の眼を据ゑながら、じつと大浦卓三の顔を打守りし體に、二十貫目の大兵も何とやら聊か薄氣味わるくなりぬ、

「花野さん、ちよいと待つた、實はね、その娘の縁談に付いて、内々あの八卦屋に相談した事もあるから、まづ一方の返事を聞いて後にしよう、や、八卦屋さん、居るかね」

さらぬも身を潜め耳を欵てながら、そつと熊公の塹まで壁一重に攻め寄せし朝鮮影、かくと聞くや否、麥藁細工の笛に等しき聲を張り上げぬ、

「先口々々、兼ての御内談は出来て居ますよ、只今それへ拙者が取極に伺ひます、全體どこの何奴が来て居るんですい」

色狂者と慾狂者、朝鮮髯が犬の如く吼えて噛み付けば、花野露雄は猿の如く齒を剥いて引ッ搔く騒動、また例の掴み合を始めしが、二十貫目以上の大兵を備へし大浦卓三に襟首を掴み上げられて、犬も猿も一時に左右へ四垂れぬ、

「は、は、は、相變らず困ツたもんだね、どうして二人さう交誼が悪インだよ、同じ長屋に住んで居て加之も壁一重ぢやアないか、馬鹿々々しい、八卦屋さんも少しやア自分の家業と年齢を考へるが宜い、また花野さんも愛敬を賣る俳優に似合はないこつた、大切な顔面道具に疵でも出来ちやア事だぜ、まさか舞臺の稽古でもあるまいよ、

は、は、は、

眼の前に止手さへあれば、もはや大丈夫と心得て、なか／＼強い朝鮮髯、螻蛄に似たる細首を振り立てぬ、

「ことし四十八の幸運齋、まして聖人の四徳を傳へて以て業と致す身ですが、その青

二歳め馬の脚の分際も顧みず、いつも拙者に對うて無禮を働きますから拙者また止むを得ず易は變也、即ち時に隨ふ變易の術を以て其奴に」

「おい／＼、くだらない事を饒舌るに及ばないよ、こゝは淺草でないから、まア暫く黙ツて」

一方を押ふれば、また一方に逆も當らぬ今年の南瓜野郎、いよ／＼色づいて鼻持のならぬ體なり、

「どうせ年が年中、心にもない怨恨を受けたたり妬まれたりするのには覺悟の前で、いはば當然の身ですが、八卦屋のやうに露骨の眞正面から來られちやア、いくら何でも堪忍が出来ませんよ」

大浦卓三、おもはず身を反しての高笑ひ、

「はッはッはッはッなるほど、こりやアさうかも知れないよ、兎角、色男といふも

のは他の嫉妬を受けるに極ツてるさ、は、は、は、しかし花野さん、もはや五十に手が届いて、ほしやく、髯でも生える人間が、たゞ岡焼ばかりで子息のやうな年齢の違つた若い人に喧嘩を吹ツかける理由は無からうさ、ところで今の縁談一件だが、つまり大浦卓三が悪かつたよ、一方に先口の内談をして置いて、また汝さんに相談しかけたんだからね、は、は、は、いッそ今のうち雙方ともに諦めて貰はう、實は先刻、こゝへ來た妻の妹だがね」

いつの間に歸りしか、折しも隣屋より壁越に熊公の大聲、

「旦那、そんな馬鹿野郎の先口も後口もあつたもんぢやアねエ、手ツ取早く今この鼻アを直ぐに叩き出しますからね、少々御不足ア堪忍して、わッしに下せエな、

あけても暮れても拜み奉ツて大事にかけますぜ、は、は、は、

「や、こいつア妙だ、細君さへ承知なら早速遣るぜ」

朝鮮髯、手を拍ツて踊り出しぬ、

「めでたいく、さしづめ拙者が媒酌人、こりや目度たい」

大浦卓三が制するも聞かず、竹細工に等しき手足を跳ね飛ばして、しきりに踊り出す向脛へ無念残念の花野露雄、がぶりと喰ひ付けば、きやツと叫んで忽然また一喧嘩を持ち上げぬ、

親より子に對して十萬圓の財産を無事に遺さるゝと、百萬圓の借金を其まゝ譲らるゝと、いづれを取るかといへば、その十萬圓の遺産を固く守りて年々の利子に衣食住の安樂を求むるよりは、寧ろ百萬圓の負債を兩肩に荷うて奮勵一番、これを首尾よく捻ぢ直すか美事に踏み倒すべきもの正しく大浦卓三の如き男なるべし、

人間は容貌の大小と體量の輕重をもて論ずべからずと雖も、のツしりとして二十貫目

以上の悠々たる風采は、既に尋常一般の商人に不似合なる男、まして失敗の結果その財産を差押へらるゝや、七人の債権者に對うて一言の哀も乞はず、妻子を他に預け自己は飄然として八軒長屋の奥に蟠居しながら、箸にも棒にもかゝらぬ一蓮托生の化物どもを相手に無頓着なる我まゝの洒落滑稽を極め、加之も其間に敵を引寄せて翻弄するが如き大膽なる言語中また案外の巧妙なる圓轉滑脱を含みつゝ、いつしか攻守の地位を轉倒して例の高笑ひ、蜂でさへ倒しまに家を作りますとは凄けれど愛敬あり憎れど面白き男なり、

競賣期日の間に神戶より持ち込みし六萬圓の破産申請は、まづ第一に取消されしのみか、今後ますます却つて取引上の地盤を固め、十三萬圓の借金は其まゝ七個年の据置と定め、さらに五萬圓の流通資本を債権者の頭割に出させ、都下あらゆる新聞紙上

に半ページづつの廣告を掲げて、こゝに再び清韓貿易の大浦商會は雨後の明月に等しく、一時の黒雲を破つて京橋の中央へ差し上りぬ、加之も其廣告の末に大浦卓三が一個人の資格として左の如き一節を添へぬ、

借金のために財産を差押へられ一時閉店致居候處幸ひ身體に異狀無之また商品運轉上にも差支無之者と認められ更に債権者一同より倍舊の借金を重ねて再び開業仕候間此段辱知諸君に御安心を乞ひ併せて四方の顧客諸君に改めて御引立を奉願上候以上、

清韓貿易大浦商會主人 大浦卓三謹白

三月の間、八軒長屋の九尺二間に二十貫目の大兵肥滿を横へながら、どこに五體の急

所あるやら日夜たゞ高笑ひせし大浦卓三、いよく暫し浮世の外に等しき破疊三枚の上を放れて、またもや生存競争の眞ッ只中へ伸張り出でぬ、

同じ浮世の落武者ながら、酒屋の小僧に攻めぬかれ味噌醬油の通帳に陣笠を叩き割られし雑兵ではなく、敗れても金鍬形の眉廂深き大將分、暫時こゝに身を忍んで敵の動靜を窺ひしが、時こそ來れと盛り返せし大浦卓三、いよく再舉の旗印を翻して八軒長屋を立出でぬ、

三月越に假寢の夢を包みし白毛布三枚は、そのまゝ朝鮮髻と西川と石作の三人へ記念に残し置きつゝ、別に酒肴料とせし三圓づつを長屋中への一列一體、お虎婆アにも花野露雄にも脱漏なく配りし上、いよく改めて挨拶に立廻りぬ、

「さて長らくの間、皆さんの厄介になりましたよ、しかし、どうか斯うか這ひ出す抜

け穴を目ツけて兎も角、また元の京橋へ歸りますからね、もし、あの邊を通行の節は遠慮なく立寄ツて下さい、おかけで百日あまり世の中を忘れて暢氣に面白く暮しましたよ、はゝゝゝなアに實は蒼蠅い嫌な浮世に舞ひ戻つて、わざと苦しい樂屋の貧乏機關を染め直しの借金幕で張り通すよりは、人間生涯の差引勘定、こゝに此まゝ寢轉ンで氣樂に好きな馬鹿口でも叩いて居たいのだが、これまでして來た罪が重くツて、さう安く問屋で卸してくれないから、つまり残ツた年貢納めに引出される結果だ、はゝゝゝこれを考へると其日に少々不足はあつても、身體が丈夫で氣に心配なく暮せば、結句どれほどの幸福か知れないよ、だから随分お達者に長屋中、ますます交誼よくしてね、いはゞ一家内も同然だ、何かの深い因縁で斯ういふ工合に落ち合ツたんだらう、幾久しくお互に睦み合ツて貰ひたい、強ち此處を出るのが人間の出世ぢやアないよ、まして壁一重で居ながら八卦屋さんと花野さんのや

うに、どういふもんか顔さへ見りやア直ぐ其場で掴み合ッたり噛み合ッたりは甚だ宜しくないね、は、は、は、は、

みすく、虚病の薬代に八圓を喰り取られしお虎婆にさへ、あらためて三圓づつの酒肴料を送りながら、わけて心易くせし壁越の熊公夫婦へは何一品も與へず、妻女の許より迎ひの車に飛び乗ッて長屋中に見送られつゝ、微笑を含んで其ま、馳せ去りし後に、まづ第一の不審を打ちしは朝鮮髯、そつと熊公の袖を引いて私語きぬ、

「熊さん、羨む理由ぢやアないが特別に前以て内々、うまい事をしたね」

「なアに乃公だけは、どういふもんか御多分に漏れて貰はねエよ」

「そんな筈があるかね、全體、幾何になツたい」

「卑しい事をいふない、同じ一棟に住んでる長屋一體の中で、うぬばかり餘計に物を貰ッて其ま、猫糞にするやうな男ぢやアねエよ、もし萬一そんな事がありやア其場

で辭退する熊さんだ、まさか乃公一人に下さらねエ理由も無からうが、こりア旦那が忘れたんだらう、どうしても貧乏圖に出來てるよ、は、は、は、は、

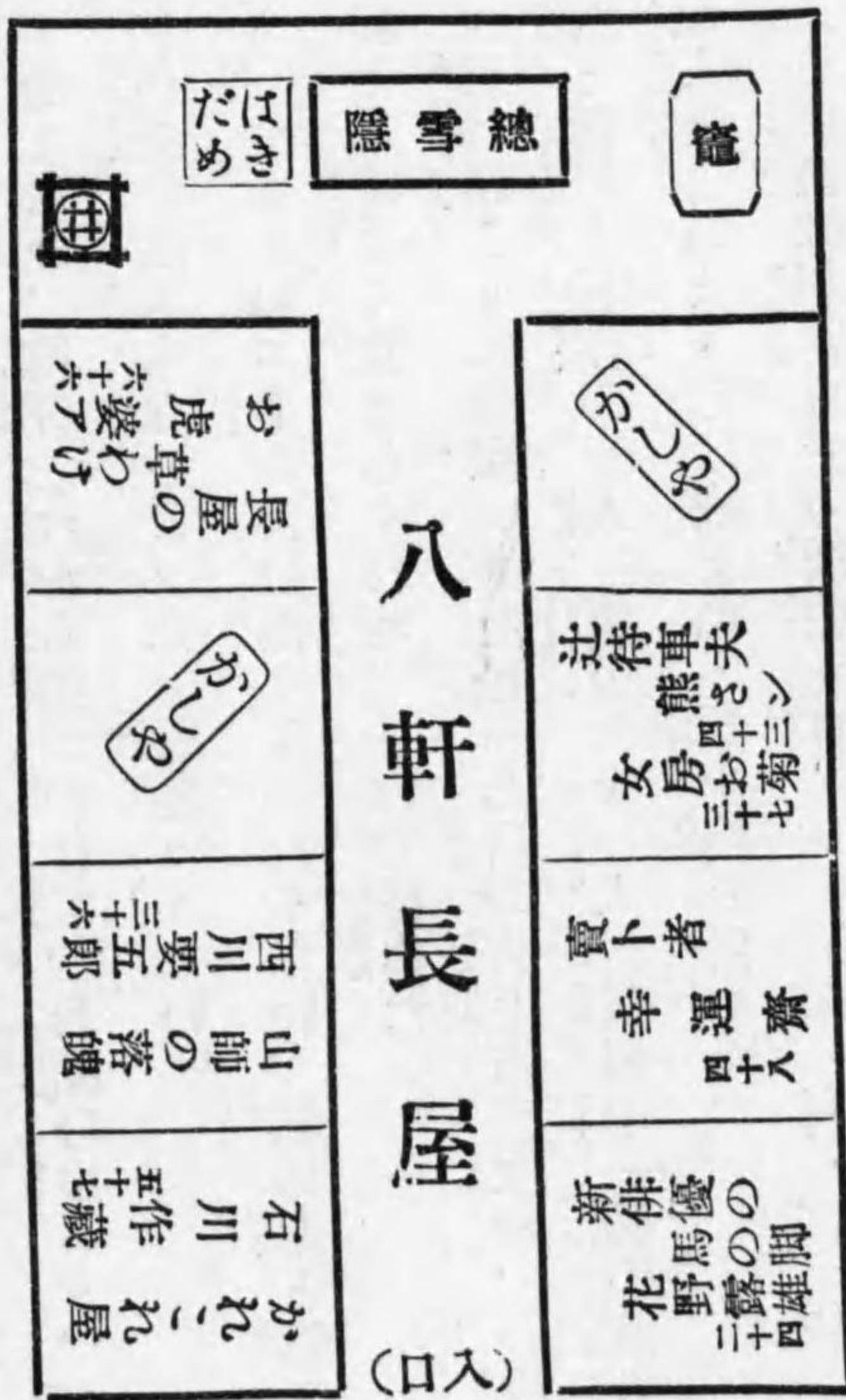
「そいつア濟まない、拙者これから追ッかけて、お願い申さう、第一あの因業な糞や隣屋の色狂には入らないこツたよ馬鹿々々しい」

「おい、つまらねエ事を言ひ出してくれるない、氣の毒と思やア皆が貰ッた中で酒の一杯も心持よく飲ましくれエ、それで澤山だ」

大浦卓三が三月越こゝに假寐の夢を包みし白の大毛布三枚を、一枚づつ記念に貰ひ受けし朝鮮髯と西川と石作の三人、熊公たゞ一人が長屋中一體の酒肴料に漏れしと聞かや否、義理人情このまゝでは濟まぬと額を鳩め出しぬ、

されど本人の熊公は相變らずの無慾淡泊、つまらねエ事を言ひ出してくれるなど笑へば、今更立去りし大浦卓三に追ひ願ひもならぬ次第、結局は六軒に三圓づつ合して十

八圓の上より頭割に一人分を産み出さんとすれど、熊公また首を振って、なアに旦那



が忘れたんだ汝達に出して貰う筈がねエと濟まし込めば、いよ／＼こゝに熊公を客分として長屋中より受持の酒宴となりしが、さて例の業突張お虎婆アは大の不承知、妾

は酒も飲めず齒が抜けて喰ふものも割前だけは喰へぬと吐す、また色狂者の花野露雄は久しぶりの三圓を掴んで堤防を押切りし洪水の如く何處の花柳界か淫賣宿へ、前夜より流れ出して不在との事に、朝鮮髻と西川と石作、おもはず舌鼓を打ち鳴らしながら、さア斯うなれば我々が熊さんを徹夜の御馳走だ、畜生め香でも嗅けば嗅ぎ代を取ってくれるぞと叫び出しぬ、

三人で九圓のうちより四圓を出して、一人前に一圓づつの酒肴、そも／＼この八軒長屋こゝに開闢以來、いまだ會てこれなき大酒宴なり、宴席は三人の鬮引にて石作の塙と定め、鮪の刺身に鹽鯖の焼肴、赤貝の酢の物に蜆の味噌汁、酒は三升樽を荷ぎ込んで、加之も其日は朝より目を剥き合せて一粒の飯も口に入らず、べこ／＼になるまで腹を空して待ち受けながら、もはや絶體絶命いよ／＼堪へ難き夕暮の頃ともなれば、豆ランプ二個の外に俵の番號を記せし熊公の提灯と神

易の二字を現はせし八卦よい屋の弓張提灯を軒先に吊して景氣を添へ、破疊三枚の上
 に大浦卓三が記念の白毛布を敷き連ね、主客四人ぐるりと魂魄の飛び込みし酒肴を圍
 んで圓陣を構へつゝ、明日の浮世は知らず眼前の天下泰平に酔うて罪も報いも痴氣も
 あるものか、人間こゝに今夜の極樂浄土、さア矢でも鐵砲でも持つて来いといふ勢ひ
 なり、

これでも昔は名ある料理屋の床柱に心配のない脊骨を持たせながら燭臺の影より這ひ
 寄る色目づかひの女に酌を取らした全盛男の成れの果ちやと、西川が怪しげなる端唄
 を唸り出せば、いやこゝにも一人、米の價を知らぬ角地面の家庫を揉み潰して来た若
 旦那の落魄が居るぞと、石作の口三味線、拙者も母の胎内より八卦よい屋の算木筵竹
 を持つて出ぬ隠し藝、これ見てくれと朝鮮髻が丸裸の餓鬼踊りに、熊公も古手拭の向
 鉢巻、やんやくと手を拍ちぬ、

大厦高樓に一夜萬金の宴を張つて翌日の新聞紙上に謳歌せらるゝ當世紳士には、却つ
 て人知れぬ心の底に怖ろしき差引勘定の算盤珠を弾けど、あはれ八軒長屋の九尺一間
 に三升樽の底を叩きし四人の酒宴は胸に一物もない天真爛漫、たゞ茲に一つの不足は
 今この同じ境涯に落ち込んで世を忍ぶ大不平の文士の筆端神來の畫伯なきが今夜の遺
 憾なり、

四人もろともいつしか酔うて手足も利かすなれば、そろく泡を吹いて横這ひに蟹の
 如し、

加之も口だけは人に譲らぬ八卦よい屋が、ほしやく鬚を捻りながら、俄に瘦せたる
 肩を恃て、白眼を剥き出しぬ、

「ねエ、熊さんも西川さんも石作さんも何と思つて居なさるい、そもく酔つて件の
 如しぢやアないが、全體どういふ理由で今夜は四人だ、過日の一件で七味唐辛子の

喜助は遁け出したまゝだから仕方もないが後に現在まだ、二疋この席へ出なくツちやア濟まない奴が居る筈だ、大浦の大將が退際に長屋中いゝ久しく睦み合つて交誼よくしろと言はれたが、これで交誼よく一家同然に交はれるかね、あの因業婆といひ第一は拙者の隣屋に罷り在る馬の脚め、新参若輩の身も靡みす今夜の義理人情を平氣に外すたア、けしからん畜類だ、彼奴のために頬ツ邊を引ツ掻かれたり向脛へ喰ひ付かれた怨恨を今こゝで言ふんぢやアない、こりやア長屋の制裁として何とかしたいもんだ、まして謝罪證文一札のある奴だぜ」

熊公、おもはず片手を宙に打振りながら、片手に持ちし大湯呑の酒を下に置くや否、天井を仰いで笑ひ出しぬ、

「おい／＼今更野暮な理窟を荷ぎ出しちやア困るよ、酒は氣で飲み人ア心で面白く話せるんだ、もし彼お虎婆が糞慾の深エ皺ツ面で、のこ／＼こゝへ遣つて来て見ろい、

堪らないぜ、は／＼其上また汝、あの色狂者に呵しな目配で妙な工合に、小さいやらしい女の素恍惚でも聞かされて見ろ、それこそ胸が悪くツて折角の酒も肴も美味くねエよ、は／＼なア西川さん」

十千萬圓の鑛糞野郎は相變らず身を反らして家の内でも自然に西の方角へ馴れし尻目づかひの仔細めいたり、

「眞實だ、變な義理人情に割り込まれて油に水の交るよりやア、かうして氣の合つた四人が結句の僥倖だ、しかし熊さん、大浦の大將は出來た人だね、あれが男だぜ、同じ人間に生れたからア、足跡でも宜いから、あゝいふ工合に世の中を踏んで見たいよ、そも／＼この長屋へ流れ込んで來て出た奴ア、都合これまでに八人もあるが木賃宿の梁に兵兒帶を懸けて首吊往生の先生、狼狽へた雀に巢を作られさうな廂の行方知れずが二女、ごろ書生の煙になつた奴が三人、近くば因業婆の氣絶に驚い

て遷け出した七味唐辛子、いづれも皆こゝを満足に出たンぢやアない、實は居るに居れない奴等で、こゝから目出たく運を開いて立派に出直した人間は大浦の大將だ一人だ、流石の西川も一言ないよ」

その左に酔ひ潰れしは千三屋の石作、むくりと鎌首をあけて冷かに笑ひぬ、

「西川さん、感心するは宜いが流石の二字だけは少々、耳觸りだよ、は、は、は、とこゝろで大浦の大將も、いよくこの長屋を出たとすれば、もう一蓮托生の飢餓佛でないね、つまり縁の遠い京橋の中央で大家の御主人だが伴この主人に今まで通り尋ねて往つて膝組に内談の出来るものは、まづ誰だらうね、憚りながら石作こゝに一人らしいぜ、何故つて、さうぢやアないか、大體この石作は運氣の閉ぢ塞がった貧乏人の相手になれない家庫地面の商賣だからね、は、は、は、は、」

一日、おもはぬ不意に京橋の大浦卓三より呼び寄せられし熊公、やがて勢ひ込んで走せ歸るや否、何心なく振り返りし女房お菊の横ッ面、ぴしやりと十圓紙幣三枚で叩き擲りぬ、

「やい、この獸女、恐れ入つて面の難作を取片付けろい、ふざけた阿魔だ、過日この長屋中へ下すつた酒肴料に乃公一人が漏れた時、うぬア妙な面をしやアがツたぞ、え、おい、そんな事に如才のあるもねエも尋常な旦那と違つてるンだい、畜生あれだけの御苦勞人といふ事が見えねエか、目のくり珠ア面の皮の破綻ぢやアあんめエ」

そのまゝ飛び出して、向側の西川が塙を差覗きぬ、
「西川さん、わツしも至急こゝを出ますよ、都台八人これまで満足に出た奴アねエといふが、おかけで熊ア明日の朝か晝ごろ、煙にもならず確實な行方を定めて、兎も角も目出たく暇をしますよ」

その隣屋の石作へも首だけ入れての大聲、

「千三屋さん、どうだね、過日は汝達の御馳走になつたが今夜ア、わつし一人で三人を客にするよ、どこへも出ずに口三味線の音じめを掛けて置いて貰ひてエ、氣の毒

だが家庫の相談より此方の身が先に極つたぜ、は、は、は、

大きくや否、待ち兼ねて自己より飛び出せし朝鮮髻、俄に黄色の聲を振り立てぬ、

「熊さん、ど、全體どうしたんだ、外は差置いても拙者には委細の理由を熊さん、そ

れでは濟むまい立って居ちやア困るよ、まづ這入ってさ」

「は、は、は、汝を遺して出るなア、何だか可哀さうな氣もするがね、どうも仕方がねエ

よ、實アかうだ、今朝、不意に京橋から直ぐ來いと使者でさ、往つて見るとね、

や、驚いたぜ、思つたよりやア大層な商店だ、手代小僧の乗り廻す自轉車が五六挺

も門口にあつてね、椅子に倚つかゝつた洋服の番頭が二三人も控へて居てさ、旦那

ア奥に例の調子で大胡坐、やア來たかといふ言葉の下から三十圓の支度料で、いよ

いよ熊公お抱車夫、それも嫌なら何か外に喰ふ道を拵へてやるたア、涙が滾れたよ、

乃公ア胸が一ぱいになつて御挨拶が仕得なかつたぜ、おまけに嗅アは米も味噌も自

然に湧いて出る大きな臺所の取締よ、九尺一間で喰ふや喰はずの山の神め俄運の放

し飼に狼狽へて水瓶の中へでも迂り込んだまゝ水死を遂げなきア宜いがと、今から

心配だ、これでも流石に夫婦の情だね、は、は、は、

朝鮮髻おもはず熊公の袖を捉へて半泣きの體なり、

「おい熊さん、細君の恍惚を聞くんぢやアないよ、この拙者は此まゝ此處に取残され

て、この後どうなるんだね」

「さう言つたつて仕様がねエよ、まア神妙に根氣よく淺草へ出て居るが宜い、その瘦

せツこけに身體で敵手見ずにつまらねエ喧嘩なんかしちやア無効だぜ、乃公が居な

く無りやア猶更だ、そのうち機会を窺つて旦那に何とか、お縫り申してやるからね」
 「だつて熊さんに今、出て行かれちやア心細いよ」
 「は、は、は、ことし四十八にもなつて何だい、馬鹿々々しい、しかし慾氣はあつても毒
 氣のねエ人間だ、もし喰へねエ事でもありやア旦那は兎も角、そつと乃公が食客的
 に置いてやるよ、どうか斯うか自分か這ひ出した曉に昔馴染を振り捨てるやうな熊
 さんぢやアねエさ」

ほろ俣の榻棒を握つて、稼げどもくあはれや多年の貧乏神に脚下を搦まれつゝ、今
 日まで浮ぶ瀬のなかりし熊公夫婦、おもはぬ不意の運に捨はれつゝ、いよく八軒長
 屋を這ひ出しぬ、
 固より追従輕薄に求めて得たる運でなく、諺にいふ青竹を割つた如き男、その日を喰
 ふや喰はずの境涯に暮らしながら、持つて生れし腹の底に一點の卑しき業も工夫も巧

まぬ夫婦、それだけ尙更ら苦勞人の大浦卓三に見抜かれて、いつまで此まゝ捨て置
 くは惜しいもとの一言、果して今日の幸福を産み出しぬ、
 加之も曾ては見損ひし例の星影先生を木賃宿の首吊往生より十文字に脊負うて歸り、
 その日の米代を香華に手向けて親身も及ばぬ涙もろとも回向せし男、今は首尾よく見
 當てし大浦卓三に長屋中一列の酒肴料を漏らされながら、少しの目色も變へず其まゝ
 笑うて三人の振舞酒に心地よく酔ひし男、いかに執念深く取付いた貧乏神さへ、もは
 や遠慮して福の神に役目を譲るべき自然の時節到來なり、
 まして夫婦の愛情に神聖の看板も掲げず家庭圓滿の講釋も知らず、口を開けば今にも
 蹴飛ばさんばかりに喚き罵れど、こん畜生と吐鳴る底には何等か言ふに言はれぬ感謝
 の意味あり、この宿六と叫ぶ裏には人知れぬ涙の種ありて、良人は妻のために咽喉を
 鳴らせど酒を飯に代へ、妻は良人のために腹は空けど寢酒の一杯も飲ませたい心常

に喧嘩の源は却つて清き泉の溢れ合、とても裏長屋にあるべき夫婦でなし、されど八軒長屋より今この熊さん夫婦を引去れば、多年の名物こゝに失うて、加之も一蓮托生の要を抜き取られしが如く、あとは互に面の鑄型こそ變れ、人間の出来工合は五十歩百歩の朝鮮髻と西川と石川と因業婆と色狂者、この互角の徒輩に聊か異なる毛色を備へて暗々裏に一統の重鎮となるべきもの、やがて何處よりか流れ來りて三軒の空屋を塞ぐとすれば、其うちの一人にありや否や、

熊公、いよく去るに臨んで何とやら名残り惜し氣の體、おもはず聲を曇らせぬ、

「盆と正月ア勿論、月に一度づつア必ず遊びに來るよ、不吉な事をいふやうだがね、

もし長屋中に變つた出來事でもありやア知らしてくれ、こゝア乃公の忘れたくねエ、ところだ」

どこまで優しき男ぞ、自己が運を開きし出世の首途に、ほろりと一掌、螺の如き握り

拳に擦りあけぬ、

九尺一間の塀に運命を縮めて、同じ貧乏神の氏子ながら、持つて生れし氣も心も貧しからぬ男一疋、多年この八軒長屋に自然の趣味を添へし名物の熊公が去つて以來、ここ暫時は何となく秋の野分の淋しさに似たり、

わけて力と頼む熊公に取り残されし朝鮮髻、俄に悄氣返りて平生の呵しみなく、さらぬも瘦せこけたる貧相いよく半泣きの體となりつゝ、隣屋の色狂者にさへ今まではどの毒口は得吐かず、第一お虎婆には猶更ら恐れを抱いて、この上の味方に頼むもの西川と石作の二人あるのみ、

加之も大浦卓三の餘徳を拾うて、をりく家業の八卦よい屋を休みしが、また今宵より淺草へ出ずば飢死の外ない悲しさ、夕暮の空に破れたる黒の山高帽子を戴き齒の缺

けたる日和下駄を穿ちつゝ、神易の弓張提灯を携へて算木筮竹の一風呂敷を小脇に抱へながら、西川と石作の戸口を左右に覗き込みぬ。



「交易とは一陰一陽を謂ふなり、運移と變爲は自然の數で泰否消長の理、仕方がなし」

と諦めて今夜から西川さん石作さん、また神妙に淺草へ出ますよ、熊さんが居なくなつて以來、何だか心細くツて堪らない、不意に片腕を取られたやうだ、どうも氣が乗らないよ」

石作おもはず笑ひ出しぬ、

「なんだね、つまらない、さう急に凹垂れるもんぢやアないさ、熊さんが親でもなし子でもなし、いくら深切づくの懇意にしたツて、まさか自分の鼻アと汝さんを取ツ交へる筈は無いからね はゝゝゝしかし長屋一體の上から考へると、本人の出世は兎も角、なるほど惜しい男を出して仕舞ツたよ、もし外の事で出るとすりやア無理にも引止めたい人間だ、口と手は荒くツても氣心が優しくツて、どこに憎氣も嫌氣もなく出來て居た人だツたから、ねエ西川さん」

隣屋の西川また今更ら感慨の體、

「眞實だよ、ほろ俵を曳いても實ア此裏長屋に過ぎもんだ、おまけに連れ添ッてる山の神が案内あれで下司張らず愛敬があつて、加之も萬事如才なく出来て居たからね、大浦さんに限らないさ、この西川だつて我も昔は男山、往時の西川なら捨て置かないね、キツと拾ひ上げるさ、だが後へ取残された八卦屋さんは聊か氣の毒の状態だ、これまで何事も一切熊さん熊さんで持ち切つて来たから、今となつちやア却つて我我よりも一倍の落膽だ、まして壁一重の色狂者とは、春以來まだ和睦もしない喧嘩腰なり、その上に、あのお虎婆が随分執念深い因業で、何だか熊さんへの遺恨を後繼者に向けるやうな工合だぜ、よほど氣を附けないと危険だよ、うかくすると突撃に出喰はすかも知れないからね」

朝鮮髯、いよく堪らず前後を見返りながら顔色を失うて聲を潜めぬ、
「石作さん、西川さん、頼むよ、なアに別段、さう驚きもしないがね、相手が相手だ

から萬一、馬鹿な目に逢つちやア、つまらないよ、かうなつた以上は柔よく剛を制するの外に策なしだ」

神无方、易无體、其无方體者、何以知之、必也、由卦而後見焉とは夜なく淺草の山門脇に笠竹を揉んで饒舌り立つれど、實は出るに氣なく入るに力なく其氣力なきもの何を以て知る、悲しや熊さんを失うて而して後の今更ら俄に落膽せし朝鮮髯、はつと思はず溜息を吐く隣屋には色狂者の花野露雄、あの時この八卦よい屋さへ邪魔せずば、既に出來た筈との戀の遺恨まだ根に持つて、そろく壁越の喧嘩を仕かけ出しぬ、
「八卦屋さん、お一人で嘸お心細く、淋しいこつてせうな」

きけば黙ッて居られぬ朝鮮髯、
「餘計な御世話だ、今に始まつたこつちやアない、昔からの獨身者さ」

「なるほど、さうでしたな、時に前夜から、また淺草へ出なさるやうだが、何だか急に精が出ますね」

「家業だよ」

「その家業に就いて、ちよいと伺ひたいんですが、齒の痛むのは全體、どうして癒りませう」

「齒醫者が宜いさうだぜ」

「いや、齒醫者よりも是非、こりやア汝さんに療治して貰ひたいんだ、汝さんの向脛に喰ひ付いた時から不思議に痛み出した齒だからね」

「な、何だと、この色狂者の病犬め、此方こそ御人品に今まで文句もいはず堪忍してやツたんだ、まだ向脛に反ツ齒の痕が付いてるぞ畜生」

「畜生、病犬、色狂者、面白い、さう承知の上は何をするか知れないぞ、實アあの時

たゞ一度で、よく向脛の味を噛み占めなかつたからね」

「ごそく、這ひ出す物音に、もはや堪らぬ朝鮮髻、あツと驚いて飛び上りつゝ、向側の西川か石作へ駈け込まんとする出合頭に突き當りしは生憎また例の因業婆、躑きながら胸倉へ喰ひ付きぬ、」

「さアこの八卦野郎、唐突に何の遺恨あつて老婆を突き飛ばしやアがツた」

「怪我だよ、怪我だよ」

「おや、怪我だア、怪我で物事が済めやア世の中に間違ひはないぞ、怪我だくと吐す奴に限ツて、どうかすると本氣に突き飛ばす下心のあるもんだ、全體この春以來をかしく妙に景氣づいて居やアがツたのが癢に觸ツてならないんだ、すぐ出て行く奴に胡麻を摺ツて宜いか、この長屋の開山ともいふべき老婆を馬鹿にして宜いもんか、幸ひ今日こそ損得の勘定書を見せてやるぞ」

「この通りだよ西川さん、石作さん、聞えないかね」
呼べど叫べど西川も石作も折から不在中、あはれや青くなつて振り返る背後に反ッ齒
を剥き出す色狂者、いよく夾撃に出ッ喰はしぬ、

「俳優さん、この八卦野郎このまゝでは置けない事があるんだよ、遁け出すかも知れ
ないからね、氣を付けておくれ、さア野郎、もう斯うなりやア口でいふ事を聞かな
いぞ、幾何でも出せ、無きやア三日間、お慈悲に待ッてやるから淺草で稼ぎ出せ、
どうだ、素股くゞりの七味屋でも二十貫の大男でも敵手不見の熊でも引ッ掛ッた以
上、たゞで通さなかつた腕は知ッてゐるだらう」

「そこだく、婆さん確乎と頼むぜ、實ア此方にもあるんだ、さア八卦屋、時と場合
で仕方なく出した兼ての謝罪證文一札、返すか返さないか」

朝鮮髻、進退こゝに谷りぬ、

なるほど、颯に羽の生えた如き七味唐辛子の喜加さへ驚いて遁け出し、山が崩れても
動ぜぬ筈に出来た大浦卓三さへ呆れて閉口し、あの熊公さへ唸りぬかれて思はず首を
縮めし古今無類の業突張、其お虎婆に胸倉を取られし朝鮮髻が何として助かるべき、
加之も生憎西川と石作の不在中、みすく昨夜の淺草にて久しぶりの運よく稼ぎし六
十七錢のうち五十錢を奪ひあけられしのみか、わけて第一の無念心外は色狂者にまで
例の謝罪證文一札を取返されて、もはや泣くより外に出る息もない八卦よい屋、ます
ますこゝに弱り果て、青くなりぬ、
またお虎婆と色狂者は手を拍ッて笑ひながら、凱歌を奏して其まゝ意氣揚々と引あけ
つゝ、互に人知れぬ舌を出しぬ、

「どうだね俳優さん、うまいところが、あるだらう」

「いや眞實、感心だ、いくら名人の舞臺だつて、あゝ巧く、ぴつたりと行かないよ、おまけに相手の八卦屋め、藝に嘘はなしさ、ぶる／＼震へて心底から半泣きの工合胸倉を掴まれて瘦せツこけた身體を反身に驚いた調子、どうも言へなかつたね、ははゝゝゝ」

「なアに一度あゝいふ目に逢はしてやらないと癖になつていけないさ、あれで少しやア氣が付いたらう」

「おかけで例の一札も取返したから、もう何を吐したつて大丈夫だ、實ア今まで随分これがため、いつも彼奴に先を越されて困つたよ、どうかすると直ぐに振り廻しやがつてね、しかし今日といふ今日こそ溜飲が下つた、ぐつと一時に胸が空いて宜い心持だ」

「幾何か奢ツても宜からう」

「や、奢りたいね、こりやア奢らずに置けないよ、幸ひ昨日、ちよいと樂屋へ藻漕り込んで、大入の祝儀袋を他の分まで三四枚ちよろまかして來たからね、そいつで今夜、一杯、威勢よく飲まうぢやないか婆さん」

「おや、豪氣だね、世の中にやア自分の取るもんさへ取外す馬鹿もあるが、他の分まで掠つて來るやうになりやア人間の一人前だ、その調子で猶この上とも油斷なく確乎おやりよ、ぢやア此方でも八卦野郎から取つた分で煮豆の二三錢、買つて置かう、過日あの鑛糞と千三屋と熊公と朝鮮髯の四人が徹夜、騒々しく喰ひ酔つて居やアがツたからね、今夜ア二人で面白く陽氣に羨ましてやりたいよ」

「あの時に外れた二人だから、いよく妙だ、なるべく夜を更して、そろ／＼奴等の寢る時分に騒き出してやりたいね」

「無論さ」

「こいつは面白い」

例の謝罪證文一札を首尾よく取返せし色狂者の喜悅、他の分まで三四枚ちよろまかせし大入の祝儀袋より五合の酒を携へて忍び込めば、お虎婆また朝鮮髻の胸倉を掴んで絞取り取りし五十錢より四錢の煮豆を用意して待ち受けつゝ、わざと宵のうちには互に聲を潜め物音を静めしが、はや十時を過ぎて、そろく長屋の寢入らんとする頃、俄に騒ぎ出しぬ、

ことし六十六の因業婆が酒に喰ひ酔ひし調子外れの大聲、まだ卵子の殻も取れざる青二歳の色狂者が、なまなか舞臺の端しくれを甜め損ねし黄色の科白まはし、加之も夜更けて猶更ら激しく響き渡る一蓮托生、耳の底を貫いて枕頭にブリキ細工の盪を叩き割らるゝが如し、

流石の西川も石作も寢るに寢られぬ苦しき辛さ、腹立ちまぎれに壁越の苦笑

「こりやア驚いた、どうだい石作さん、寢られますかい」

「人間も長生すりやア、いろんな目に逢ひますが、あゝいふ奴にかゝツちやア、叶はないよ、まア今夜ア此まゝ逆も無事に睡れませんぜ、何かの因果だらう、母親と同胞め一時に氣が狂ひ出したと諦めて、お互に辛抱するんだね」

「まだ石作さんは人が好いね、どう考へても、この西川は現在あんな母親や兄弟を持つたとは諦められないよ、しかし耳だけの災難で僥倖だ、もし不運に其場へ出ツ喰はして目にでも見せられちやア、それこそ煙ひ付くね、あの業突張が酒に浮いて變に呵しくなツた工合、あの色狂が酔ッぱらツて妙に崩れた工合、どんなだらう、嘸うすツ氣味の悪いこツたらうな、はゝゝゝ」

「なアに西川さん、あれでね、奴等ア溜飲を下けて復仇の心算だよ、そら過日熊さ

ンを客にして四人で騒いだ時、あの二疋を入れなかつたからさ、だが頗る妙だ、お虎婆と馬の脚の取組、こりやア面白いぜ、なか／＼珍だぜ、どうなるかね、こゝ一月ばかりは看物だよ」

「なるほど、さうだな、その邊だらう、は／＼／＼時に髯は今朝かはいさうに我々の不在中、奴等の爽撃に逢つてとんだ痛傷を蒙つたといふこつたが、あの馬鹿騷動を聞いちやア猶更ら堪るまい、さうでなくつても熊さんが出て以來、急に力を落して情氣返つてるからね、元の髯なら石作さん、こんな時は第一番に飛び出して呵し味のある人間だからねエ、よく／＼弱り込んだと見えるよ」

「後楯を失つて、哀れつほく勢ひの脱けたところへ奴等ア、いよく／＼附け込んで酷い事を爲やアがるんだよ、加之も我々まで居ない時を規つて、あの瘦せつこけた胸倉を占めたり向屋へ食ひ付くなんて、いけ太い畜生だ、どうか三軒の空屋へ腕ツ節の

喧嘩早い人間を入れて、一番ぎゆうといはしてやりたいもんだな、實ア髯と抱き合

つて一緒に腰を抜かした因縁もあるからね、は／＼／＼」

をりしも塙を這ひ出して忍び寄りし朝鮮髯、そつと外より口を當て、聲を潜めぬ、

「西川さん、石作さん、口惜しくつて残念でならないよ」

お虎婆と花野露雄、五合の酒に四錢の煮豆、そろ／＼長屋の寢込む頃より始めて、其まゝ意地わるく夜明まで騒ぎ通す筈なりしが、いつしか互に酔うて崩れて次第に聲も調子も低くなりぬ、

慾には地獄の釜の底汁でも吸ひ取るべき婆ながら、ふしぎに酒は若い時より一合が關の山、まして今年こゝに六十六の皺腹へ思はず二合あまり注ぎ込んで、正體なく酔ひ潰れし相手の馬の脚、此奴また色には的もない狂氣ながら、元來さのみ飲めざる口へ

圖に乗って二合あまり、もはや跳ね出す蹄の音もなく横はりぬ、

「花野さん、露雄さん、どうだい、酔ったねエ、大變に酔って仕舞ったよ」

「酔ったとも、は、は、は、酔ったぜ、もういけない、この上は一罌も御免だ」

「なんだね、もういけないって、もう一罌もありやアしないよ」

「えッ、あの五合、ないかね、悉皆かね二人で、こりやア酔った筈だ、しかし面白い、

面白いよ」

「妾も何だか面白いよ、この老年になるが、こんな飲んだのは生れて初めてだ、なるほど、かう酔って見ると悪くないもんだね、ふしぎに嬉しいね、をかしく妙に氣が浮いて来たよ」

「おい、婆さん、た、面白くなるのは宜いが、その老年で妙に、をかしく氣が浮いて来ちやア困るぜ、危険だ、安心して居れない、かはいさうに相手は二十四の男だ

よ、は、は、は、

「何、困る、何が困るんだ、まだ困るやうな事を爲さないにさ、すれば花野さん、これからだよ」

「じよ戲談、馬鹿々々しい、戲談にも程度があるよ、これから困らせられて堪るかね、かう酔っちゃア足も腰も、さアと言つて急に遁け出せないからね、こんな時に嚇かすなア罪だ、酷いよ、は、は、は、いくら飢ゑても渴ゑてもさ、俳優だよ」

「その俳優が、そう飢ゑて渴ゑながら無理に堪忍しなくつても宜いちやアないか、え花野さん、これでも女だよ、まさか木や石の苔蒸して古びたンではないよ、數へ年は六十六でも師走誕生で、今年を差引けば汝まだ六十三だよ、おまけに氣の若い性質だからね」

嘘かと思ひの外、これは案外の本氣沙汰、加之も夜は更けて隣屋は七味屋の空巢なり

向ふ二軒は大浦と熊公の空屋なり、遁け出すには腰が立たず、呼んでも叫んでも西川と石作と朝鮮髻いづれ来てはくれず、なるほど見れば六十六でも慾の皮と共に張り切った達者婆、酔うて浮れて前後の差別もなく恥辱面目もなく、じわくじわく這ひ寄る體に流石の色狂者も堪り兼ねて、此奴の生涯にあるまじき音を出しぬ、

「こゝかう、かう酔ッてるんだから、婆さん今夜ア、なアに年齢が違ッても人が何と言ッても、この道は格別だ、そのうち、また内々、そゝ相談するよ」

お虎婆、とろりとせし皺くちやの目尻に一種異様の凄まじき情を含んで、じつと花野露雄が顔面を打守りながら、ぶつと傍の豆ランプを吹ッ消せば、この色狂者、きやつと叫びぬ、

凡そ世に怖ろしく物凄きもの、老女の化粧に師走の月といへど、これは空照る師走の

月よりも猶更ら怖ろしき八軒長屋の奥に闇の夜の更け渡りし頃、豆ランプの朦朧たる影より化粧もせぬ人間化物の正體お虎婆が酒に喰ひ酔うて這ひ寄りつゝ、窪める老の眼に一種異様の色を含み、皺くちやの額際に十筋ばかりの白髪を立て、脱け残る亂抗の齒を現はしながら、雀は百まで踊を忘れぬ凡例、乾いてるやうでも苔の下の岩清水、妙に氣が浮いて来たよ、どうしてくれるといふや否、ぶつと火を吹ッ消して首筋に嚙り付かれし花野露雄、おもはず驚いて、きやつと叫びしも無理でなし、

されど叫びしは只その時に思はず叫びし一聲、なさないかな、實は此奴元來の色狂者、まして女といふものを生涯の目的としながら未だ曾て横町の牝犬にさへ尾を振られし事のない奴、加之も同じく喰ひ酔うて夜は更けたり四邊に人はなし、遁け出すにも腰は立たず手足は利かず、夢うつゝに捻ぢ伏せられしまゝ何となりしか、まッ闇がりに其後の聲なく音なし、

むかし男の業平は百歳に一歳足らぬと戯れて、九十九髪の色も香も消え失せし冬枯の老女に情しりの名を唄はれしが、今この花野露雄は六十六の因業婆に強ひられて、果は何といふ浮名を流すやら、色狂者め、せめて三四十の年ならばと、半は後悔しながら残る半は儲また強盗に出逢ひしほどの憎うもない面相、ほのくくの東天の黎明に自己が塙へ忍び歸りし體、かの大浦卓三と熊さんに見せてやりたし、されど慾とは違ひ流石これでも聊か遠慮勝の心地、いかな恥知らずの婆も我年齢を數へて孫子に等しき男、まさか前夜は斯うと手柄顔の吹聴も仕兼ねつゝ、その翌の朝は表障子を閉め切りながら、うすき煎餅蒲團一枚に二日酔の白髪首そつと擡けて、今更ら浮かれし死花の返り咲き、皺に摺り込む紅白粉もなければ、どんぶり鉢の水鏡に澁紙面の雑巾がけ、もはや現世の息を引取るまで花野露雄を放さぬ覺悟なり、やうく晝を過ぎし頃、糞蟲の葉末を傳ふが如く這ひ出でて、月に一度も場に入りし

事なき身が、どこを磨かうとてか、今日に限りて俄に古手拭を提げながら、ぴよこびよこ立出づる姿、じろりと前後を見廻しつゝ、そろりと色狂者の塙を差覗きぬ、加之も此お虎婆に斯る音も出るかと思ふばかりの猫撫聲、
「花野さん、露雄さんへ、誰が言つたもんか、よく出来てるね、縁は異なるもの味なもの、とさ、ほゝゝ、今夜また一杯、飲もうよ」
流石の色狂者、ぞつと總身に沁みて、おもはず寒くなりぬ、

力と頼みし熊さんを失ひ、加之も西川と石作の不在中、不意の挾撃に出遭うて大枚五十錢を奪はれ、例の謝罪證文まで取返されし朝鮮髻、無念骨髓に徹せし折柄、そのお虎婆と色狂者の怪しき臭氣を嗅ぎ出すや否、いかでか堪るべき、こりや有難山の寒鴛に角が生えたよりは面白いと、自己が手足も振り切るばかりに踊り上りぬ、

「西川さん、や、不在かね、石作さん、さア事だ、いよ、珍事出来、たしかに見届けた」

「何だね唐突に、あぶない、そら其處に釘が出てるよ」

「なアに少々ぐらゐ疵を負つても差引勘定の付くこつた、石作さん、さりとは油断大敵、珍無類、じつとしては居れないよ、大變々々」

「また君の大變が始まつたよ、全體どういふこつたね」

「どうも斯うも石作さん、あの色狂者に女が出来たよ」

「ふむん、妙だね」

「妙の妙、立の立、あまりの不思議で智慧袋が破れて仕舞つて、さらに立々また妙々、とても人間凡夫その所以を知るべからずといふ色女が出来たよ」

「はてね」

「はてね、で濟まないよ石作さんほんやりしてるぢアないか、その色女は現在お虎婆だぜ」

「えッ、お虎婆、いえさ此、この長屋に居る、あのお虎婆かね」

「どうだい、あッといふ外に文句が出るかい、石作さん、お互に生涯これが呆れ返つた膽の潰し最終だぜ、三日前の夜、奴等二人が酒に喰ひ酔つて、くそ喧しく寝られなかつた時、俄に耳を貫く一聲、家鴨でも占め殺したやうに、ぎやツと聞えたらう、そら、あの時だよ、加之も其後が案外ひツそりと静閑になつたらう、そもくあの時が事の起因で、今から考へると馬の脚め、無理往生に捻ぢ伏せられたらしいね、はゝゝゝ」

「なるほど、さういへば、あの時、どうも變だと思つたが、こりやア驚いた、いくら相手のない色狂者でも、あの因業婆に不意打を喰ツちやア堪るまい、出雲の神様だ」

ツて、まさかと安心して居た隙を覘ツて、やらかした藝だな、は、は、は、しかし確實な證據はあるかね、うツかり饒舌り出すと面倒な奴等だぜ」

「あるともく、大あり名古屋の城ぢやアないが、動かぬ證據歴然で、その翌日の晝ごろ、いつにない事あの婆が湯に出かけたぜ、加之も出かけに内々そツと隣屋を差覗いてね、花野さん露雄さんへ、といふ聲が既に平生の調子と違ツて、恐ろしいもんだ、此長屋に六年も居る拙者、あんな聲を彼のお虎婆の口から始めて聞いたよ、おまけに文句が乙だね、縁は異なもの味なもの、とは石作さん、凄じいぢやないか、は、は、は、それがため實ア二日も淺草を休んで考へた、すると果して其夜の二時ごろ婆が襲ひ込んだ様子だ、また前夜は前夜で、四邊の寢靜まるを待つて馬の脚から這ひ出した様子だ、なアに石作さん、最初の不意討には面くらツて少々厭氣もあつたらうが、一度二度と重なツて来りやア、根は色狂者さ、六十六の婆でも化物でも空

腹に不味い食なし、こいつア次第に募ツて變に擲ンで、そろく今に深くなり出すよ、まづ八軒長屋に前代未聞の珍聞、五百塵劫の末世まで再び出来ない因果經だぜ、は、は、は、

「なさけない奴等と住み合ツたぢやアないか、え、この末どうなるだらう、強慾の深い業曝しは得て色氣も深いといふからね、もし彼のお虎婆が、あれで何かの罰に馬の脚の種でも孕んだと來たら、それこそ笑ひごツちやアないぜ、どうせ難産の死物狂ひ、自暴になツて、や、石作にも這ひ込まれた八卦屋にも口説かれたと言ひ兼ねないぜ」

「は、は、は、あれでも其點だけは人間通例だ、それまで十月もあるからね、さう恐れるに足らないさ、平生の遺恨この時にあり、ゆるく慰み半分の遠巻きに攻めてやる覺悟だ、は、は、は、」